

関東地方の常滑焼大甕

—考古資料からみた中世の内陸水運—

村山 卓

要旨 胴径 80cmを超える常滑焼大甕を「大甕 L」と呼称し、流通の実態を検討した。関東地方における大甕 L の分布は鎌倉周辺に集中し、常滑編年の 7 型式期に急増する。その後、8 型式期以降には周辺の下総・武蔵地域にも分布が拡大する。

南武蔵と下総地域では東京湾に面する品川・千葉と、武蔵府中周辺の遺跡があり、海上輸送や多摩川を用いた水運による移動が指摘されている。埼玉県新井堀の内遺跡の事例についても元荒川を遡上する運搬経路が想定され、近接する近世河岸の存在もこれを支持する。また、坂戸市・毛呂山町周辺の出土例からは、入間川水系の川津（湊）を経由した流通が想定できる。サイズ・重量を鑑みても、関東地方から出土する大甕 L は、水運との関連が強い遺物と位置付けられる。

資料の分布からは、流域の各所で荷揚げされるのではなく、特定の「集散地」を経て流通していたと想定された。具体的には規模の大きな館や宿の所在地で、渡河点を備えるような水陸交通路の要所が候補である。そういった場所は川津としても機能した場所が多かったと推定する。

『金沢文庫文書』にみえる下河辺庄赤岩郷の事例からも、14～15 世紀に元荒川・古利根川の河川交通が、今戸等の湊を経て東京湾水運と連結していたと考えられる。一方で流通の背景としては、鎌倉周辺と連動した流通量の変化が気になるところであり、14 世紀代における社会の変化を踏まえた検討を行う必要があるだろう。

はじめに

蓮田市・新井堀の内遺跡では、常滑焼の甕に収められていた大量出土銭が検出され話題になった。内部の銭貨は、大部分が現状保存されているため、正確な数は不明だが、一緒に出土した木簡の記載にある「二百六十くわん」が内容量を表すなら、260 貫文、ざっと 26 万枚の銭貨が入っていることになる（埼玉県埋文事業団 2020）。

大量出土銭自体は、埋設状況が調査で明らかであり、性格論などの視点から貴重な調査例と言えるが、今回は、その容器である「常滑焼」に注目したいと思う。

本稿では、次のような検討を行いながら、遺跡

から出土した甕の位置付けを考えていきたい。

- ① 常滑焼の年代観
- ② 常滑焼大甕のサイズ
- ③ 最大径 80cm 以上の大甕（大甕 L）の出土状況
- ④ 内陸部までの搬入の経路
- ⑤ 内陸部における水運関連史料

「常滑焼」の年代観

中世の常滑焼甕の編年については、プロポーシオンや口縁部形態の変化を捉えて型式学的な変遷を遂げることが確認されてきた。例えば、大甕の縁部は古期の単口縁から、つまみ出すような

折り返しが加わり、所謂「N字形口縁」が頸部との透き間を消失する過程として整理されてきた。その骨子は、赤羽一郎・中野晴久によって体系化され、1～12型式におよぶ生産地編年が構築されている（赤羽1984、中野1994、1995、2005、愛知県史編さん委員会2012）。大枠での変遷過程はほぼ固まっていると言える。

一方で、各型式に付与されている年代に対しては、主に消費地における共伴遺物から疑問視する意見が出ていた（梁瀬2008）。2015年には藤澤良祐らが問題点を整理するとともに、甕・片口鉢・山茶碗について型式を設定し、組列を検討している（藤澤・山本・小山2015）。経緯については、同書に詳しいのでここでは省くが、結果的に「少なくとも8型式期から11型式期にかけては中野氏の年代観より1型式ずつ遡るものと思われる」「7型式期は13世紀第4四半期あたりまで遡る可能性が極めて高く、6b型式期以前についても漸次遡るものと思われる」「6b型式期は13世紀代3四半期に、5型式・6a型式期は13世紀初頭を含まない13世紀前半代に置くのが現状では妥当であると思われる」と年代観の誤差を指摘した。

ここで、藤澤らが示した年代観を整理すると、次のようになる。

【中野5-6a型式・13c第2・3四半期】

→13c前半（13c初頭を含まない）

【中野6b型式・13c第4四半期】

→13c第3四半期

【中野7型式・14c前半】

→13c第4四半期

【中野8型式・14世紀後半】

→14世紀前葉まで

【中野9型式・15世紀前半】

→15世紀初頭まで

【中野10型式・15世紀後半】

→15世紀前葉

【中野11型式・16世紀前半】

→15世紀中葉

中野晴久はこれを受けて『東海窯業史研究論集I』に見解を記している。その中で、8型式以降の窯資料が極めて少なく年代的な根拠が弱い点をあらためて確認し、7型式が若干遡る可能性もあるとした。消費地での出土状況を踏まえた藤澤らの年代観について評価をしているが、鎌倉における片口鉢の在り方を例示し、疑問も呈した（中野2018）（註1）。近年刊行された日本中世土器研究会編『新版 概説中世の土器・陶磁器』では、「知多（常滑）窯の編年は95年版と基本的な枠組みは変わっていないが、知多半島北部の甕類と片口鉢に関して新たな編年が提起され、中世後期の編年に関しても新たな見解が示されている」と記すが、編年図中に示された年代観（西暦）は従来のものを踏襲している（中野2022）。

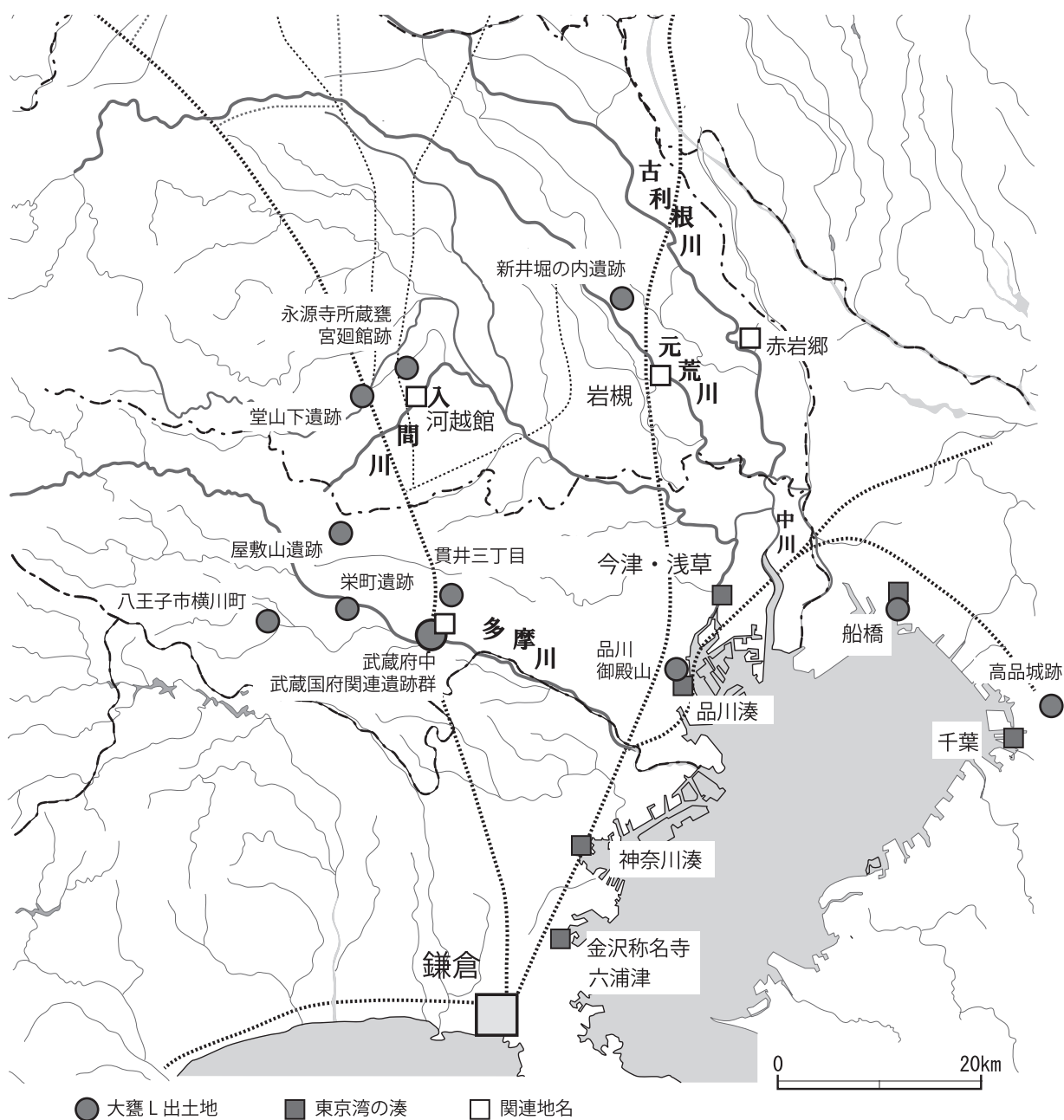
窯資料の限界もあるなか、消費地におけるクロスチェックを契機として、年代観は流動的である。本稿では、さしあたり藤澤らが提示した年代観を援用するが、基本的には型式名（中野による1～12型式）を用いて遺物そのものの検討を進めていく。

新井堀の内遺跡から出土した常滑焼大甕

では、関東地方における常滑焼大甕の様相について検討していきたい。まず、新井堀の内遺跡（埼玉県蓮田市）から出土した大甕のサイズについて確認する（埼玉県埋文事業団2020）。

新井堀の内遺跡で大量出土銭の容器として用いられていた甕は、胴部（肩）の最大径96cm、口径60cm、高さ77cmほどの巨大なものであった。肩部には押印文が巡る。形態的には、最大径を計測する肩部がかなり上部にあり、寸胴形態の印象である。この甕を「甕A」と仮称したい（第5図2）。

内部の銭貨には永樂通寶（1408初鑄）が複数含まれているので、15世紀初頭以降に埋設され



第1図 関連遺跡位置図

たものと考えられる。ただし、ひび割れ部分に布を漆で貼り付けた補修痕が多数みられ、別用途のものを転用したと考えられる。

新井堀の内遺跡からは、もう1点、復元可能な常滑焼の甕が出土している。大量出土銭に隣接する別の土坑から出土したものである。復元したサイズは、胴の最大径が92cm、口径が50cm、高さ92cmである。甕Aよりも器高が15cm程高く、

肩の位置も高い。遺存の程度は全体の1/3程度である。歪みによる復元高の誤差も想定されるが、それを考慮しても甕Aと同等以上のサイズのものと見て良い。この甕を「甕B」と呼称したい(第5図1)。甕Bも銭容器として用いられていたようだが、その詳細については報告書と上野真由美の論考(上野2021)を参照してほしい。

2つの大甕はプロポーションや口縁部縁帯の形

態から常滑編年の9型式に位置付けられる。また、甕Aに納められた最新銭は永楽通寶であり、甕が15世紀前葉以降に埋設されたことは疑いない(註2)。

本稿で注目したいのは、甕A・Bのサイズである。いずれも胴径が90cmを超えており、一般的に「常滑焼大甕」と言われているものより、一回り大きい。たとえば、大量出土銭容器の事例として著名な東京都府中市・国府関連遺跡群(並木西ビル地点)では、常滑焼大甕を用いた二例の大量出土銭が検出されている。その大甕はいずれも胴径60cm程度であり、新井堀の内遺跡の大甕よりひとまわり小型である(第2図参考資料)。

かつて筆者は、千葉県に伝世した15世紀の常滑焼を報告したことがある。その際、千葉県・茨城県域の常滑焼大甕を集成してみたが、大多数が胴径60cm程度のものであった。一方で、鎌倉地域では胴径90cm程度を測る大甕が一定量出土しており、地域における流通状況の差について示唆した(村山2006)。

その後、神奈川県平塚市に伝世した16世紀の常滑焼大甕を報告する機会があったが、この甕は胴径85cmの「特大の大甕」であった。各地の出土状況と伝世資料の来歴から、こういった「特大の大甕」が、何らかの生産活動に伴って、主に埋設して用いられたと想定した(白石・村山2011)。

前稿では、胴径80cm以上を測る常滑焼の大甕について、「特大甕」という仮称で扱ったが、本稿では、胴部最大径80cm以上の大甕(Large size)を「大甕L」、胴径60cm前後で、80cmを超えない「通常サイズ」の大甕(Regular size)を「大甕R」と呼称する(註3)。

常滑焼大甕のサイズによる出土状況の差

では、大甕Lはどの程度出土しているものだろうか。

第1表には、茨城県・千葉県・埼玉県・東京都を対象に常滑焼・渥美焼の大甕を集成した(註4)。概ね、海に面する常陸・下総・上総・武蔵の四カ国の様相である。

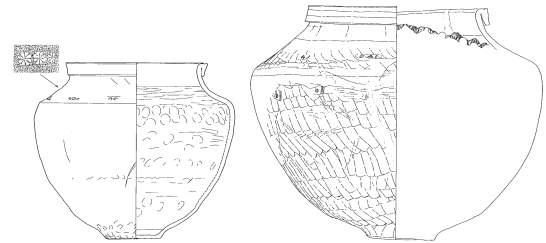
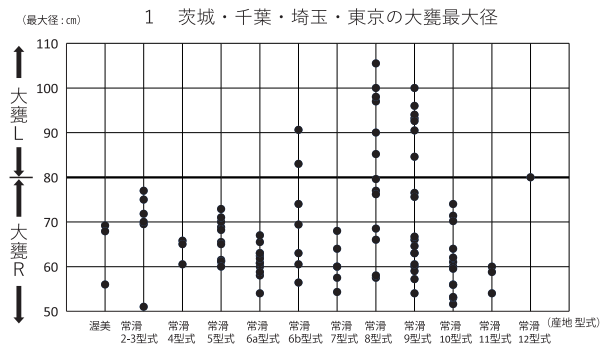
集成対象は、口縁部が遺存し、肩部までの全体の形状が遺存、ないし復元図示されたものに限った。遺存状態が比較的良くても、計測データや実測図が確認できなかったものは扱わなかった。また、サイズは胴部最大径50cm以上のものを示した。

集成し得た大甕は103例、そのうち、胴部最大径80cmを超える大甕Lは僅かに16点である。多くの大甕は胴部最大径60cm前後の大甕Rであり、大甕Lは全体の二割に満たない(註5)。そして、時期的な特徴では、8・9型式に事例が集中する点が明白である(第2図-1)。

次に、東国の中心的な都市として発展した鎌倉の状況を確認してみたい。第2表は、鎌倉地域とその周辺のやぐらなどから出土した例を集めたものである。一部、肩部・口縁部の欠損資料も含んでいるが102例を集成し得た。集成漏れも多いと思うが、鎌倉地域に流通した常滑焼甕の傾向を把握することは可能だろう。

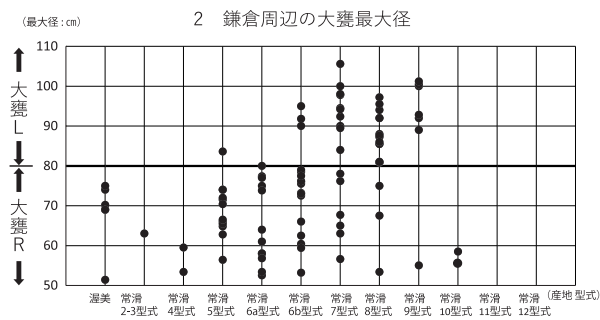
このうち胴部最大径80cmを超える大甕Lは37例に及び、全体の1/3を超える。武蔵国など周辺地域の状況とは明らかに異なっていることが判る。時期も、周辺地域よりやや早く6b型式期から増加しはじめ、周辺地域で類例が増える直前の7型式期に急増する(第2図-2)。このことから、鎌倉周辺では大甕Lが他地域に先行して増加し、遅れて周辺地域に拡散していくものと推定される。つまり、鎌倉における大甕Lの採用と、地方での大甕Lの増加は、若干の時間差をもって連動する現象として捉えられる。

その後(8型式期以降)、周辺地域では多く流通している大甕Rが、鎌倉地域ではほとんど見られない点も特徴的な事象である。

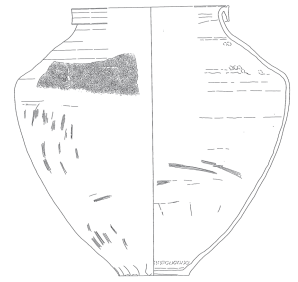


東京都武蔵国府間遺跡群 (並木西とみ地蔵)
(府中市教委『武蔵府中大量出土土銭の調査概報』2001)

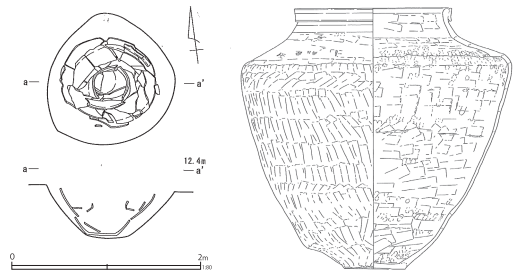
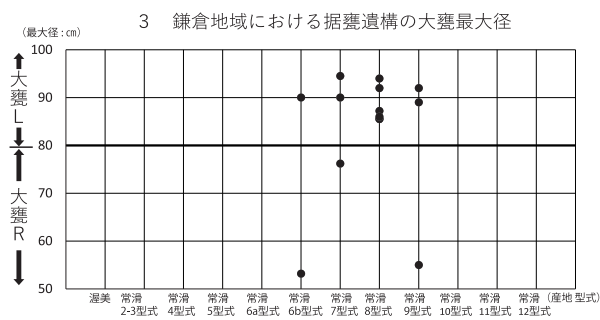
埼玉県新井堀の内遺跡
(埼玉県『新井堀の内遺跡』2020)



鎌倉市今小路西遺跡 (朝成町200-2)
(鎌倉市教委『鎌倉市緊急埋蔵文化財
発掘調査報告書22』2007)



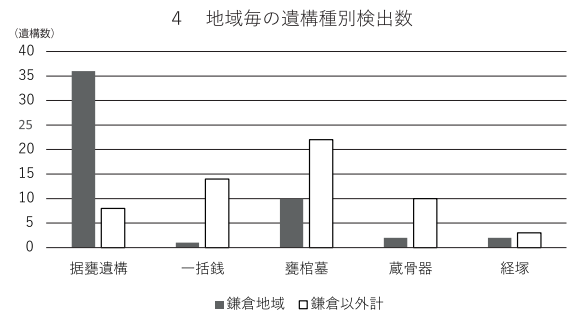
鎌倉市今小路西遺跡 (朝成町176-7) の据甕
(鎌倉市教委『鎌倉市緊急埋蔵文化財
発掘調査報告書29』2013)



鎌倉市大蔵幕府周辺遺跡群 (田ノ下三丁目648-3) の据甕遺構と据甕
(鎌倉市教委『鎌倉市緊急埋蔵文化財発掘調査報告書35』2019)

遺構種別一覧表 (大甕R・Lを問わない)

	据甕遺構	一括銭	甕棺墓	蔵骨器	経塚	地域別計
鎌倉地域	36	1	10	2	2	51
群馬県			2			2
茨城県			1	1		4
千葉県			3	11	5	19
埼玉県	2	6	3	2	1	14
東京都	3	2	6			11
神奈川県	3		1	3		7
(鎌倉を除く)						
鎌倉以外計	8	14	22	10	3	57



(* 大甕R・Lを問わない)

第2図 常滑焼大甕のサイズと時期

鎌倉地域の常滑焼大甕

鎌倉地域の傾向を理解するにあたって、甕の用途についても考えておきたい。

第2図左下の一覧表には、常滑焼の大甕が出土した遺構の種別を示す。

多くの甕はどのように使用されたか分からない。ただし、内部の納入物によっては、甕棺（非火葬）・蔵骨器（火葬）や、一括出土銭の容器・経筒外容器などが認識できる場合がある（荻野1992）。この種の遺構は人々の記憶にも残りやすいので、過去の出土例でも記録や実物が伝存する場合が多い。もちろん甕棺・蔵骨器などは別用途から転用された甕が大多数だろう。

これらとは別に、地面に据えられた状態で、ある程度の期間使用されたと思われる遺構を「据甕遺構」とした。基本的に発掘調査でしか検出できない遺構であり、また、必ずしも性格を限定し得る遺構でもない。前述の諸遺構とは性格を異にするものであるが、あえてその検出状況を地域毎に比較してみたい。

第2図－4を見ると、鎌倉地域では「据甕遺構」として検出された例がとても多いことが分かる。鎌倉地域の遺跡は何枚もの地業層（土丹層）によって覆われているが、そういった地業層の下から、潰れた常滑焼甕を据えた土坑＝据甕遺構が検出されるのである。

こういった鎌倉地域の据甕遺構に用いられた甕の時期・サイズが判る例を第2図－3に示した。データが採れる事例が少ないが、据甕遺構では大甕Lが多く用いられる傾向がある点、時期的に7～8型式期にピークを迎える点は認めて良いだろう。

これは、鎌倉地域における大甕Lの消長（第2図－2）と概ね一致しており、鎌倉地域に持ち込まれた大甕Lは「据甕」に用いられることが多かったと言える。

据甕遺構の検出場所は、山稜部や寺院境内より

も市内に集中する。従って鎌倉の都市生活に密着した遺構と考えられる。一方で、時期的な集中が認められる点や、大甕Lを選択して使用したと思われる点は、必ずしも日常生活に不可欠な存在ではないことを示唆している。

神奈川県平塚市立博物館に所蔵される11型式の常滑焼（大甕L）は、近世の酢造りの道具とともに伝えられていたものである。その使用方法是、「瓶之口を地より五七寸も拔出し居へべき也」と18世紀末の史料に記され、据甕遺構を彷彿とさせる挿図も描かれていた（第3図）。甕が生産された当初より、酢生産の道具として用いられた可能性もあるだろう（白石・村山2011）。

紀伊国根来寺や越前国一乗谷では、複数の甕を埋設した遺構で油の貯蔵や染物が行われていたと推定される（菅原1992）。単独の据甕であっても、大甕Lを埋設する遺構には、生産や商品貯蔵に関連するものが多く含まれていたのではないだろうか（註6）。

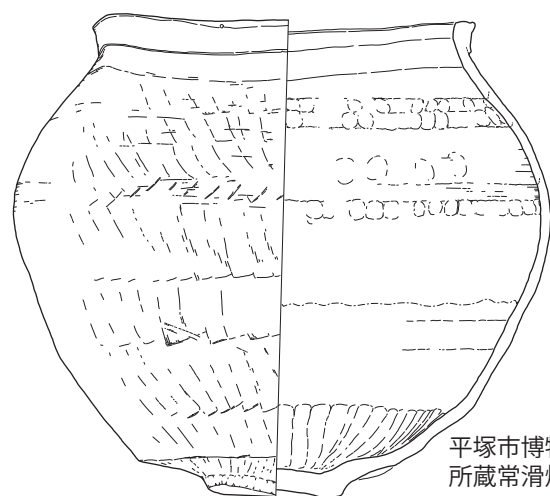
もっとも、据甕自体は単純な遺構であり複数の用途が想定される。水甕などに用いられたものもあったであろう。さらに詳細な検討が必要だが、本稿では鎌倉地域の据甕遺構について、以下の点を再確認しておきたい。

- ・7型式期に顕著な増加をみせる。
- ・大甕Lを選択的に用いる。

前者は時期的な背景があって普及したことを想定させる。そして、7～8型式期には多くの大甕Lが搬入され、けして広いとは言えない鎌倉の空間で消費されたのである。

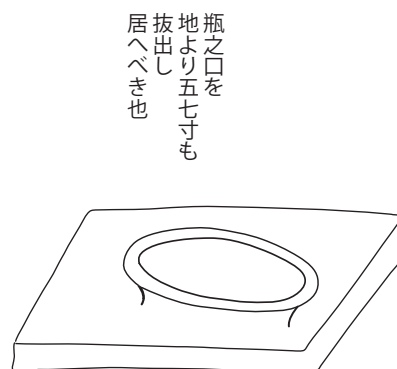
南武蔵・下総の「大甕L」

大甕Lは、7型式期以降の鎌倉地域に多く搬入されたものと思われる。前後して南武蔵の国府周辺にも出現し、まもなく8型式期には、関東各地で散発的ながら出土するようになる。以下に、多摩川流域と、東京湾沿岸の大甕Lの分布・出土状



平塚市博物館
所蔵常滑焼甕

常滑焼甕スケール
(S=1/12) 0 40 cm



瓶之口を
地より五七寸も
拔出し
居へべき也

『相州大住郡中原村御所酢之仕込様之事』
(寛政十年以降)にみえる挿絵

白石祐司・村山卓「平塚市博物館所蔵の常滑焼大甕」『品川歴史館紀要』26 2011

第3図 近世文書にみえる大甕の使用形態

況を確認してみよう。(このうち第4図には、8～9型式のものを示した)

① 東京都府中市武蔵国府関連遺跡群 (M 59)

S Z 14 (府中市教委 1996) (第4図1)

国府の所在地である府中市周辺では、常滑焼の大甕Lが複数出土している(①～③)。府中駅南口の再開発に伴って実施された発掘調査では、小型の地下式坑のような遺構(SZ14)の中から常滑焼の大甕が出土しており、胴部最大径93cm、口径58cm、高さ84cmと、新井堀の内遺跡の甕Aに近いサイズである。9型式である。

② 東京都府中市武蔵国府関連遺跡群 (N 51)

S Z 9 (府中市教委 2001)

土坑墓群の中心から検出された甕棺墓で、内部には木製仏像、刀子などが副葬されていた。土坑墓群に先行して構築されている(村山 2008)。口径50.6cm、胴部最大径90.6cm、器高87.0cmの常滑焼甕を用いる。6b型式で古い事例である。

③ 東京都府中市宮町個人住宅出土 (英 1986)
(第4図2)

府中市宮町地区の住宅地で偶然出土した大甕が、府中市の博物館に収められている。小型の地下式坑のような遺構に伴うものらしい。胴部最大径100cm、口径57cm、高さ75.6cm以上(底が欠失)である。新井堀の内遺跡の甕Aに似たサイズである。新井堀の内遺跡の事例と同様に緑泥片岩製の蓋石を伴う。9型式とみられる。

④ 東京都日野市栄町遺跡 (日野市栄町遺跡調査会 1995) (第4図7)

武蔵府中から多摩川を挟んだ西側に位置し、沖積地に立地する遺跡である。第20号土坑は、長軸124cm、深さ117cmの不整円形で、常滑焼の大甕L全体を埋設した「据甕遺構」状の土坑である。出土した大甕Lは、口径55cm、胴径90cm、器高88.8cmである。8型式である。

⑤ 東京都小金井市貫井三丁目 (小金井市誌編さん委員会 1970)

昭和40年に出土したもので、口径51.0cm、高さ75cm、底径25.5cm、肩部最大幅83cmである。6b～7型式期とされる(江口 1996)。埼玉県新

井堀の内例や、府中宮町例（③）と同様に、緑泥片岩の蓋石を伴う。また、数か所の割れ目を漆で接合し、麻布を塗布して修理しているのも、新井堀の内遺跡の甕Aと同じである。

内部に非火葬の人骨が埋葬されており、甕棺墓であったことが分る。

- ⑥ 東京都武蔵村山市屋敷山遺跡（山田 1994・武蔵村山市立歴史民俗資料館 2006）（第4図6）

明治時代の初めころに出土したものと伝わり、現在は市立歴史民俗資料館に所蔵される。出土地は江戸時代初頭の旗本前嶋氏の屋敷跡と伝わり、「屋敷山」の字名が残る。口径 53.6cm、胴部最大径 84.6cm、底径 17.4cm、器高 73.6cmである。9型式と思われる。

- ⑦ 東京都八王子市横山町出土（小坂・和田 2021・八王子市史編集委員会 2014）（第4図3）

浅川支流の城山川・大沢川合流点から 350 m 程離れた緩斜面から出土している。偶発出土であるが、出土直後に調査が行われ、逆位で出土したことが確認される。口縁部と底部の破片は接合しないが、同一個体とされる。口径 55～60 cm、胴部最大径 94～98cm、底径 24cm、高さ推定 85cmである。肩部に「大日 / 大月」銘の押印がめぐる。縁帯形態から 8型式と思われる。

- ⑧ 東京都品川区品川歴史館所蔵（谷口 1991）（第4図4）

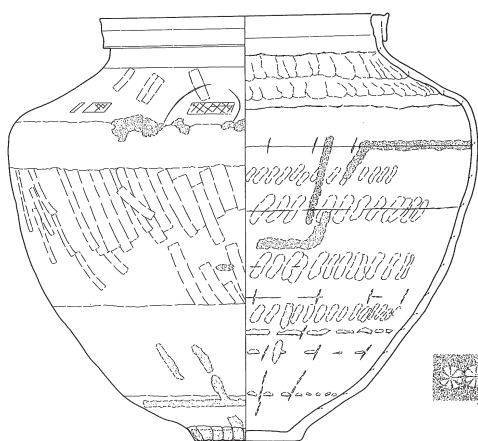
品川歴史館所蔵の常滑焼大甕は、区内の御殿山西側の民家に所蔵されていたもので、胴部最大径 94cm、口径 58.4cm、高さ 74.8cmほどのものである。所蔵者はそこにある経緯を把握していなかったようなので、古い時期に付近から出土したものと考えられる。9型式で、新井堀の内遺跡の甕Aとサイズや形が近いものである。

- ⑨ 千葉県千葉市高品城跡（千葉市文化財保護協会 1997）（第4図5）

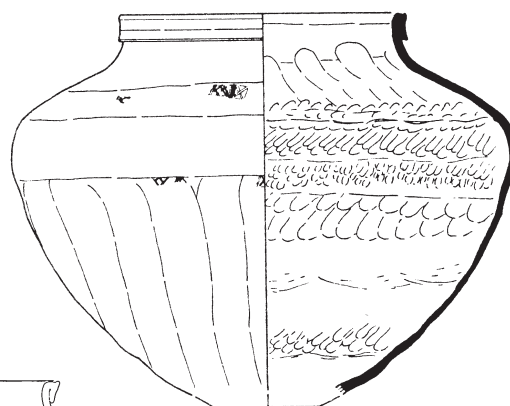
千葉県千葉市の高品城では、城跡の主曲輪に掘られた土坑の中から、伏せた状態の常滑焼大甕が見つかった。周囲には地下式坑がたくさん造られており、甕が収められていた土坑も地下式坑の一部を壊して造られていた。出土した大甕は、胴部最大径 80cm、口径 54cm、高さ 73.8cmで、新井堀の内遺跡甕Aや品川歴史館のものより僅かに小さいが、形は良く似ている。時期も同じく 9 型式のものである。

以上、東京都・千葉県の出土例を列記した。このうち、①～⑦は国府所在地である武蔵府中と、その周辺の事例である。武蔵国府関連遺跡群では、他の地域より大甕Lが集中する様相である（①～③）。さらに、周辺地域からの報告例には北東へ 4.5 キロ離れた小金井市貫井例（⑤）、西に多摩川を 8 キロ遡った日野市栄町遺跡（④）の例があり、これらの事例は武蔵府中を経由して各地に運ばれたのであろう。武蔵村山市屋敷山遺跡（⑥）の例は北西約 12 キロ、八王子市横川町例（⑦）は西約 16 キロと少し離れるが、①～⑤の事例を踏まえれば、やはり、府中を経由してもたらされた可能性がある。八王子市横川町の例に関しては、府中より上流側で多摩川と合流する浅川の上流部であることも示唆的に思える。

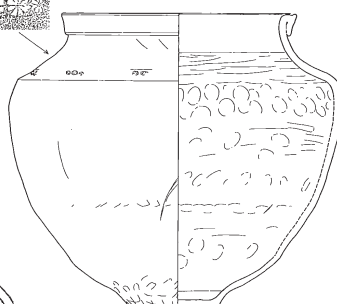
多摩川流域の事例については、既に江口桂が検討を行っている（江口 1996）。江口は品川に伝世した⑧の事例に注目し、品川湊と多摩川の水運との関連にも言及した。その視点は、以後に品川歴史館で行われた特別展に踏襲されている。品川歴史館の中世「品川湊」に関わる 2 度の特別展では、武蔵府中と品川湊の関連を示す遺物として、これらの常滑焼が取り上げられた（柘植 2009）。関連して、総社である府中大國魂神社の例大祭（くらやみ祭）の際に「浜下り」として品川の海に水を汲みに行く神事にも、国府と品川湊の関連を示す行事として紹介されている（品川歴史館 1993・2008）。



1 東京都府中市宮町1-4～10地点S Z 14
(府中市教委1996)

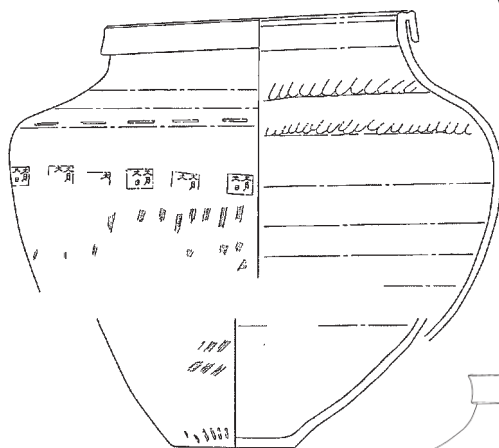


2 東京都府中市宮町個人住宅偶発出土
(英1986)

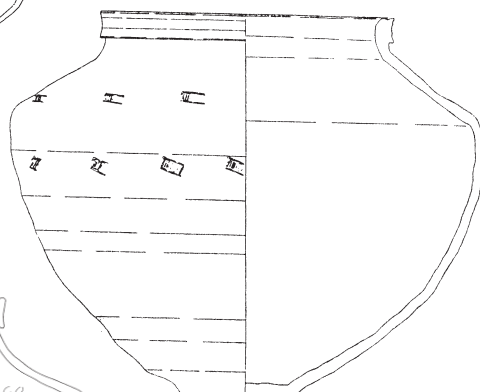


(参考資料 大甕R)

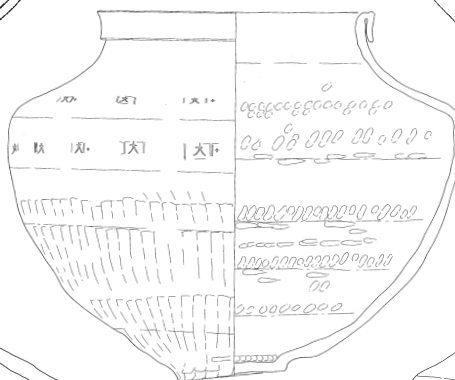
東京都府中市並木西ビル地点(大量出土銭容器)
(府中市教委『武蔵府中大量出土銭の調査概報』2001)



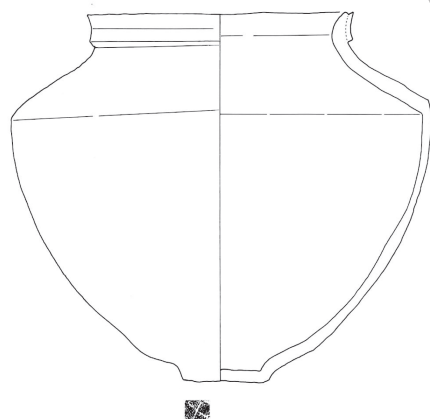
3 東京都八王子市横川町
(八王子市史編集委員会2014)



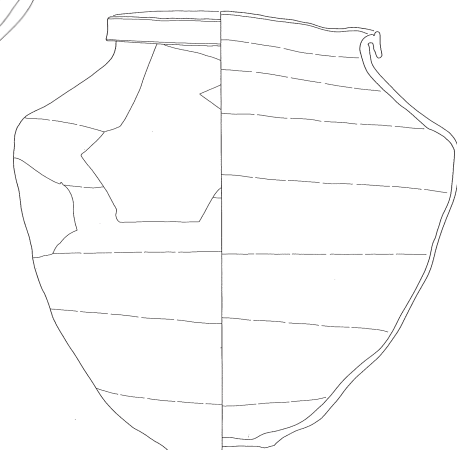
4 東京都品川歴史館所蔵
(品川歴史館 1997)



5 千葉県高品城跡
千葉市文化財保護協会1997)



6 東京都武蔵村山市伝屋敷山出土
(山田1994)



7 東京都日野市栄町遺跡L地区第20号土壙出土
(日野市栄町遺跡調査会1995)



第4図 常滑焼大甕Lの例1

以上のように、武蔵府中と品川の出土例は、東京湾と内陸を結ぶ河川交通の存在を示唆しているが、具体的に水運の実態を示す中世史料には恵まれていない。

一方、東京湾の海運については関連史料が残されており、金沢・神奈川・品川・今津などの湊に関する検討が行われている。

金沢称名寺（神奈川県横浜市）に伝わった明德3年（1392）の「武蔵国品河湊船帳」と、応永3年（1396）頃の「武蔵国品川神奈河両湊帆別銭納帳」は、14世紀後半以降の東京湾水運に関する代表的な史料である。前者の史料に記された船名には伊勢国大湊周辺の地名に因む名称が複数みられる（綿貫1989、品川歴史館1993・2008、柘植2000・2001）。

実際、東京湾沿岸では伊勢湾沿岸地域の土器鍋・羽釜が各所で出土しており、伊勢国大湊との間に活発な行き来があったことが窺われる。もちろん伊勢御厨への年貢輸送が、水運整備の背景としてあったものだろう。常滑焼もこういった水運網のなかで運ばれてきたものと考えられる。

東京湾沿岸の出土例には、千葉市高品城跡出土の大甕L（⑨）が挙げられる。当時の海岸部からは4キロ程離れているが、千葉市の歴史的環境を考えると、東京湾海運との関連が窺われる。

海に面した千葉の地は、もともと下総の有力な御家人であった千葉氏一族の本拠地で、都川の河口付近に湊を伴う町が形成されていたと考えられる。千葉氏の本流は、享徳の乱（1455）を契機に馬加（まくわり）系千葉氏へと移り、本拠地も内陸の酒々井町本佐倉城に移った。千葉は政治の中心ではなくなったが、妙見宮の門前を中心とした都市的な空間として発達したとされる（千葉市立郷土博物館2009）。

永正2年（1505）、本佐倉城にいた千葉勝胤の子・昌胤は、千葉の妙見宮まで来て元服の式を行った。途次、妙見宮に入る前に「高篠」で装束

を整えている（『千学集抜粹』）。「高篠」は「高品（たかしな）」のことで、常滑焼大甕が出土した高品城であると考えられている（千葉県史料研究財団1998・千葉市立郷土博物館2009）。高品城は、千葉市中心地の北側の丘陵上にあつて、千葉の都市的空間に隣接した場所と言える。ここから出土した常滑焼大甕も、千葉の湊から運ばれたものだったであろう。

東京湾沿岸における常滑焼大甕の出土例は多くは無いが、その一因は、沿岸の都市化の進行にあると考えられる。やはり中世の湊として発展した千葉県船橋市では、海岸に近い本町2丁目から明治2年に古銭が入った大甕が3つ出土している。その高さは約4尺と記録されている。やや大袈裟な数字かもしれないが、これも特大サイズの常滑焼甕だったと見て良いだろう。甕には永楽通寶を最新とする銭が収められていたようで、その組成から埋設時期は15～16世紀と考えられる（小高2001、船橋市郷土資料館2002）。

北武蔵から出土した大甕L①

～新井堀の内遺跡の場合

東京湾沿岸の湊町には海路で常滑焼がもたらされていた蓋然性が高い。また、内陸の武蔵府中には、多摩川の水運を利用して東京湾沿岸から大甕Lが運ばれた可能性がある。

あらためて埼玉県新井堀の内の事例（第5図1・2）について考えてみると、武蔵府中の事例と同じく、東京湾から河川水運で遡上した可能性が考慮されよう。

新井堀の内遺跡は、標高15mの台地上に占地している。延文6年（1361）の年紀を持ち、応永22年（1415）の追記がある『市場之祭文』という史料には、「黒浜市」の記載がみられるが、その所在は当遺跡の周辺と考えられ、遺跡に近接する集落に「宿」の字が残っている（春日部市教委1994）。『市場之祭文』については、年紀より

遅れて後北条氏時代以降に制作されたものとの見解が通説だが、鈴木哲雄氏は応永 22 年までには成立していたと捉えている（鈴木 2005）。そうだとすれば大甕や一括出土銭の年代とあまり時期差は無い。

遺跡と「宿」の字が残る台地の下には元荒川が流れ、川までの直線距離は 600 m 程と近い。この場所には江戸～明治時代に川島河岸という河岸場があった。下流の越谷方面から灰を運んできたと言われており、実際に明治六年の新曲輪河岸（岩槻市）の記録に、灰を川島河岸まで送った記録がある（埼玉県教委 1990）。

近世の治水工事（荒川瀬替え）以前には、元荒川は荒川の主要な流路であり、水量も現在より多かっただろう。川島河岸は、現在確認されている元荒川最上流の河岸場であるが、中世段階にはより上流まで物資を運搬し得たとみられる。

他方、川を下り東京湾に至る間には、岩槻城が所在し、新井堀の内遺跡とは直線距離で 5.5 キロ程と近い。岩槻城の成立は 15 世紀後半以降に下るが、岩槻城南方の「城山」（府内三丁目遺跡付近）は太田氏以前の国人領主、渋江氏の城館ともされる（岩槻市史編さん室 1985）。城山の調査では堀・土塁が検出されているが、16 世紀初頭頃の遺物が中心に認められる様相である。一方で、瓦など 14 世紀代の遺物も認められ、近接する渋江鑄金遺跡での鑄物生産が 14 世紀に遡る点も含めて注目される（岩槻市遺跡調査会 2002）。

岩槻の対岸、春日部市花積付近には、御厩瀬渡し・御厩領関の所在が推定され、14 世紀後半には鎌倉街道中道の渡し・河関として機能していたとされる（春日部市教委 1994）。詳細な位置は不明だが、御厩瀬渡しが渋江郷と花積郷の間を繋ぐ元荒川の渡しであった可能性も指摘されている（青木 2021）。岩槻周辺については、鎌倉街道の渡河点に近く、相応の物流拠点であった可能性も考えておきたい。

元荒川をさらに下ると、埼玉県越谷市付近で中川に合流する。そこから川を下れば、現在の墨田川の流路へと入って、東京湾に注ぐ。河口部は台東区浅草付近で、今津・石浜・浅草といった重要な湊が密集していたと考えられる地域である。

北武蔵から出土した大甕 L ②

～坂戸市永源寺所蔵甕の場合

次に、埼玉県から出土した大甕 L の例として、坂戸市永源寺所蔵例についてもみておきたい（浅野 1981）。

坂戸市永源寺に所蔵される常滑焼大甕は、現在墓地の一画にコンクリートで固定されている。第 5 図 3 に実測図を示した。甕は口径 56.0cm、胴部最大径 97cm、高さ約 70cm 以上の大甕 L である。口縁部の縁帯は幅広いが、折り返し部分は頸部とは接着せず透き間がある。8 型式に相当するものとみられる。

甕の隣には、その由来を記した花崗岩製の石碑があって、次のように記載される。

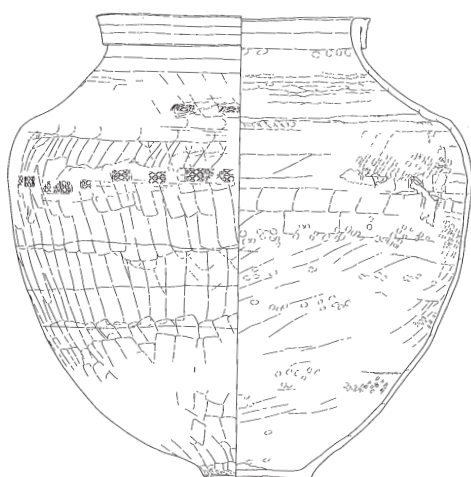
陸軍坂戸飛行場建築工事の際、城内数カ所より遺骨碑瓶等発掘ス依テ本地ヲ選テ改葬シ無縁の冥福ヲ祈ル碑其ハ約六百年前鎌倉時代ノモノナリ

昭和一六年五月

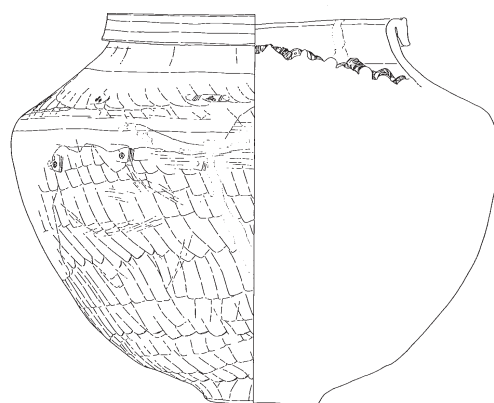
工事施行者 東京市 株式会社 小林組

石碑の銘文から、この甕も陸軍坂戸飛行場の建設工事で出土したものと考えられる。陸軍坂戸飛行場は、坂戸市千代田地区・鶴ヶ島市富士見地区・川越市竹野地区に旧在した。現在の東武東上線若葉駅に近く、坂戸中学校や筑波大学附属坂戸高等学校の敷地内には当時の建造物も残っている。ただし敷地は約 70 万坪、約 1.5 キロメートル四方の範囲に及ぶので、具体的にどこから甕が出土したのかは分からない。

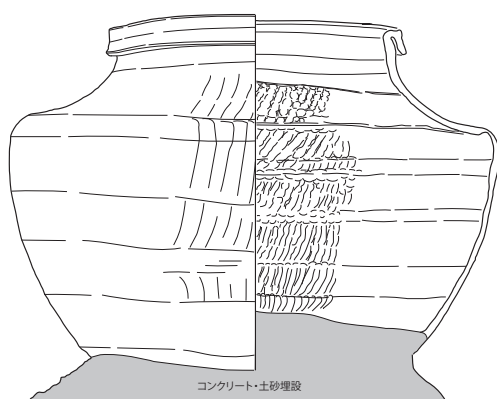
飛行場跡地の南側に隣接する川越市下広谷地区



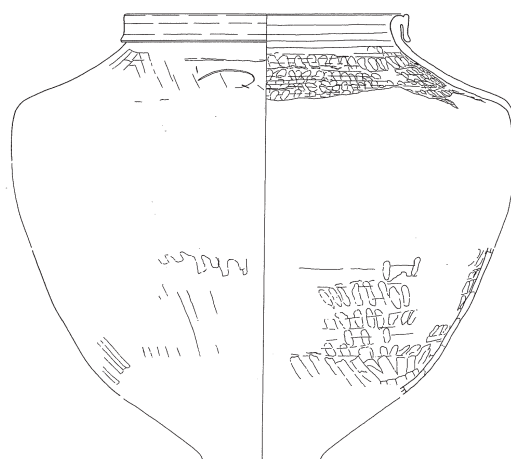
1 埼玉県蓮田市新井堀の内遺跡（甕B）
(埼玉県埋文事業団 2020)



2 埼玉県蓮田市新井堀の内遺跡（甕A）
(埼玉県埋文事業団 2020)



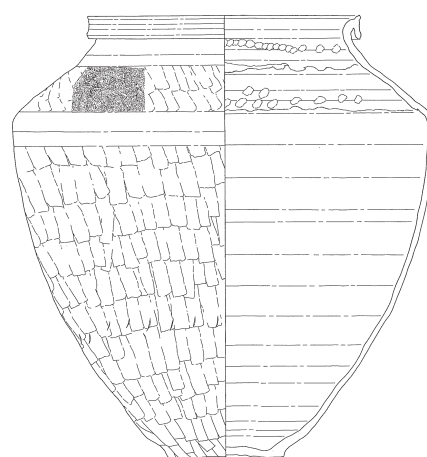
3 埼玉県坂戸市永源寺所蔵
(筆者作図)



4 埼玉県川越市宮廻館跡C区54号土壌
(埼玉県埋文事業団2002)



(写真) 埼玉県坂戸市永源寺所蔵の常滑甕



5 埼玉県毛呂山町堂山下遺跡10号土壌
(毛呂山町教委2013)



第5図 常滑焼大甕Lの例2

には、戸宮前館跡・宮前館跡・宮廻館跡など多くの城館群の存在が知られている（埼玉県埋文事業団 2008）。下広谷城館群とも呼ばれるこれらの城館は、特に 15 世紀代に展開した城館群と考えられているが、詳細は不明な部分が多い。

城館群の一部は、圏央道の建設工事に伴って発掘調査が行われており、宮廻館跡では常滑焼破片が投棄された遺構（C 区 54 号土壌）が検出されている（埼玉県埋文事業団 2004）。8 型式の大甕で、口径 55cm、胴部最大径 100cm 程に復元される（第 5 図 4）。破片数がやや少なく復元の誤差もあろうが、永源寺例に匹敵する大甕 L であったと見て良いだろう。出土した位置は城館の主郭にあたる部分であり、生産と廃棄に時期差を想定し得る。いずれにしてもこの地域に複数の常滑焼大甕 L が持ち込まれていたとみて良いだろう。

坂戸飛行場跡や下広谷城館群は、越辺川と入間川の合流点より 5 キロ程西に位置する。また、古代以来継続して用いられたとみられる東山道武蔵道と、鎌倉街道上道支道の「堀兼道」が南北に通過している。

2 本の道を南に約 3.5 キロ進み、入間川と交差した場所には河越館跡が位置する。河越館跡は当時から入間川に接近し、陸上交通と河川交通が交わる結節点に位置していた（川越市教育委員会 2015）。13 世紀初めに成立した『発心集』の巻五「入間河洪水二会事」は河越氏と河越館周辺の様子を描写したものとされるが、館の近くに「湊」が所在し「秩父の冠者」らが船を所有していたという記述が注目される（落合 2005）。有力な領主の館と川津（湊）の組み合わせは、当時の人々に違和感無く受け入れられる描写であったと考えられ、武士の本拠地（館）と川津（湊）の密接な関係を示唆する。

北武蔵から出土した大甕 L ③

～毛呂山町堂山下遺跡の場合

入間川と合流した越辺川を蛇行しながら 15 キロほど遡ると、鎌倉街道の「苦林宿」に比定される堂山下遺跡（毛呂山町）がある。坂戸飛行場跡や宮廻館跡からは西に 7 キロ程の距離である。この堂山下遺跡でも、常滑焼の大甕 L が出土している（毛呂山町教委 2001・2013）。方形竪穴遺構（2 次 10 号土坑）で出土しており、張り出し部分から破損した状態で出土した。口径 55cm、底径 23.5cm、器高 91.7cm、最大径 85.2cm に復元される。これも 8 型式である（第 5 図 5）。

甕に近接して、径 1 m 程の円形土坑が検出されており、報告書にも指摘されるとおり竪穴建物に伴う据甕遺構であろう。鎌倉以外の大甕 L で、建物の内部に据えられていたことが判る重要な事例である（毛呂山町教委 2013・佐藤 2016）。

堂山下遺跡は鎌倉街道の渡河点に発達した宿とみられ、流通に関わる遺跡であったことも指摘されている（浅野・佐藤 2022）。大甕 L の出土からみれば、越辺川を利用した水運との結節点としての意義も重視されるべきであろう。ただし、堂山下遺跡はかなり上流部なので、ここまで船が遡上し得たかは判断が難しい。当時の越辺川の整備状況・水量や季節性を考慮しなければならないからである（註 7）。

より広く越辺川流路をみると、近世に新ヶ谷河岸のあった入間川合流点より 5 キロ強遡った左岸台地上に高坂氏・小代氏の拠点（東松山市小代・西本宿）がある。この付近で川越方面への交通路が越辺川を渡河していた可能性が高い（玉利 1984・村山 2022）。さらに上流側の右岸には浅羽氏に関わる板碑を伝える万福寺（坂戸市北浅羽）や、大規模な鑄造を行った金井遺跡 B 区等、重要な遺跡が集中する（坂戸市教委 1996・埼玉県埋文事業団 1994）。おそらく、このあたりまでは小舟での遡航が可能であったのではなかろうか。堂山下遺跡の近くに川津の要素があったかは分からない（註 8）が、大甕 L は航行できる限界ま

で越辺川を遡上して持ち込まれたと考えられる。そのほうが武蔵府中方面から、はるばる陸路で運ばれたと考えるより蓋然性が高いであろう。

以上のように蓮田市新井堀の内遺跡の例は元荒川、坂戸市永源寺や堂山下遺跡の例は入間川水系を遡航してもたらされた可能性が高い。大甕Ⅰは、武蔵府中周辺の例から想定されたように河川経由で内陸へと運ばれたものであろう。

小結に代えて、北武蔵（内陸部）における出土例から、あらためて2つの点に注目したい。

1 点目は、河川流通が想定されるにもかかわらず、多摩川・入間川・元荒川のいずれの地でも、大甕Ⅰが流域に万遍なく分布するのでは無い、という点である（第1図参照）。

2 点目は武蔵府中の周辺や、坂戸市飛行場跡・下広谷の周辺では概ね10キロ前後の圏内に複数例の出土を認めるが、これらの場所は、主要な渡河点を擁する館や宿から比較的近いということである。武蔵府中と多摩川・川越館と入間川・堂山下遺跡（苦林宿）と越辺川である。同様の地理条件として、蓮田市新井堀の内遺跡と元荒川・御厩瀬渡しの関係も気になるところである。こういった渡河点の多くは、地域の重要な湊としても機能していたのではなかろうか。

以上の所見から、大甕Ⅰの流通は、特定の川津（湊）に供給され、そこから近隣に拡散した可能性が高い（註9）。常滑焼大甕のみならず、当時の流通の実態を考える上で興味深い事象である。常滑焼の大甕Ⅰは、考古学では検証が難しい「川の道」の存在をよく示し、津と陸上交通の関連を考える上でも、重要な資料であると位置づけられるだろう。

赤岩郷の年貢と河川水運

新井堀の内遺跡から元荒川を下ると、中川に合流する。「中川」は、古利根川の一部で、かつての利根川の本流である。合流地点から、北へ2キ

ロほど遡上したところで、現在の古利根川と接続し、埼玉県松伏町に至る。金沢称名寺の所領として知られる「下河辺庄赤岩郷」があった場所である。

広く知られているように、称名寺に伝わった赤岩郷関連の史料（金沢文庫文書）には水運に関わる記録がみられる。ここであらためて確認しておきたい。史料については『松伏町史 資料編 原始・古代・中世』第8章（松伏町教育委員会2021。以下「町史」）を参照した。

赤岩郷の年貢は称名寺に輸送されているが、その際には船を用いたことが、僅かな記録から窺われる。永徳2年（1382）の「赤岩郷年貢銭結解帳」（金沢文庫文書、町史66）は赤岩郷の年貢総額が記された「決算帳簿」である。この中に「五十捌（八）貫文 買米五十駄 此内ニテ船賃関米上駄賃共」とある。米50駄の購入費と、船の賃金・関銭・駄賃等の諸経費に58貫文かかったことを意味し、年貢米の輸送に船が使われていたことを示している。

一方、永享11年「赤岩十四ヶ村年貢銭結解状写」（『武州文書』所収、町史81）には「三百文 今津問方酒直（値）」とみえており、今津の間（問丸＝運送業者）への酒の金額が記される。今津は中川水系の河口（台東区浅草今戸付近）にあった湊で、船を持つ問への礼に、酒をふるまっているものと思われる。東京湾の湊であった今津と、内陸の赤岩郷が交通で結ばれていたことをよく示している。

以上の記述からは、必ずしも川の移動に船を使ったことは証明できないが、赤岩郷～金沢称名寺への年貢輸送にあたって船を使っていたことは確実である。今津を経由していることからみても、川・海ともに船を使用し、今津で積み替えが行われた可能性がある。

その場合、赤岩郷付近に湊の存在を考えなくてはならない。この地域では、かねてより川津に由

来する地名として松伏町大川戸の存在が指摘されてきた（春日部市教育委員会 1994）。大川戸には古刹、光厳寺が存在し、正安三年銘の「歸依仏」銘板碑が存在する。

近年の松伏町史編さんに伴う調査では、大川戸の宿通地区に古瀬戸系陶器や常滑焼が密に散布していることが確認され、14 世紀後半～15 世紀の遺跡の存在が判明している（松伏町教育委員会 2021）。赤岩郷の年貢を積み出したか否かはともかく、渡河や水運と関連がある地域であった可能性は高い。「宿」地名や対岸に「船渡」地名が残っていることも興味深く、今後の考古学的調査に期待したい。

赤岩郷の年貢輸送ルートを考慮すれば、14 世紀後半までには、古利根川を下り今津・浅草に至る河川流通が整備されていたものと思われる。新井堀の内遺跡に至る元荒川の水運も、中川を介してそこに接続しており、様々な物資を運搬する水上の道が存在したことが窺われる。

まとめと課題

本稿では、前半で最大径 80cm を超える常滑焼「大甕Ⅰ」の年代・分布状況を確認した。当初、鎌倉地域の据甕遺構を中心に用いられ、まもなく関東各地に拡散すること、その変化は 7・8 型式期に進行したことを示した。

後半では、「大甕Ⅰ」が出土した遺跡の周辺環境に注目した。特に内陸部では、水陸交通路の結節点に形成された「集散地」のような場所からの出土例が多く、河川を遡航してもたらされる傾向を想定した。

中世の水運研究は膨大な蓄積があり（峰岸 1995）、河川交通についても、かねてより重要性が指摘されてきた（宮瀧 1995 a・b）。ところが文献・考古資料ともに河川交通を示す資料は限られており、特に北武蔵地域の河川を経た流通は、具体的な証拠を欠くのが実態である。

しかし、下流域に多く設けられた河関の状況（遠藤 1982・八潮市史編さん委員会 1989）からは当該地域の活発な河川交通が窺われるし、戦国期・古河・関宿・新田周辺地域の舟運研究（内山 1995・新井 2011・築瀬 2015）を参照すれば、それ以前から周辺の河川交通が整備されてきたことは十分に想定し得る。史料から垣間見られる内陸の「赤岩郷」の場合も、年貢米の輸送等を通して河川から東京湾の湊とつながっていたとみられる（永井ほか 2010）。内陸水運や海路を経て金沢称名寺、そしてその背後の鎌倉とも結ばれていたと捉えて良いであろう。

以上、専ら水運で運ばれた可能性を持つ考古資料として、常滑焼の「大甕Ⅰ」を位置付けた。大甕Ⅰは東京湾の水上交通に、中川水系から元荒川・古利根川、あるいは多摩川水系の河川交通とリンクして内陸へ運ばれた。そして上流の「集散地」のような性格をもった場所にもたらされたと考えられる。

「大甕Ⅰ」が行き着く場所の光景は『一遍上人絵伝』の備前国・福岡の市に似ていたかもしれない（註 10）。川津が想定される場と、「市の立つ場所」「都市的な場」の関係も考古資料から整理していかなければならないだろう。

一方で、大甕Ⅰの流通の背景としては、鎌倉周辺と連動した流通量の変化が気になるところである。大甕Ⅰは 7・8 型式期を境に、鎌倉から周辺地域に広がっていく。鎌倉で主に据甕遺構に用いられた大甕Ⅰが地方に拡散した背景は何であろうか。

常滑 8～9 型式期には、鎌倉での遺構・遺物の量が減少に向かう一方、地方では古瀬戸系陶器を伴う集落遺跡が多く確認されるようになっていく。房総では、台地上整形や地下式坑を伴う集落が少しずつ形成され始める（梁瀬 2004）。鎌倉を中心とした中世前期的な流通網（河野 2005）の解体の中に、大甕Ⅰの流通動向も消化されるも

のであろうか。

14 世紀代における大きな社会の変化を見据え

註

- 1 中野はこの論考に付して個別型式の形態的な特徴を模式化・図示した図面を多く掲載した。藤澤らの論考でも、山本が甕・片口鉢Ⅱ類、小山が山茶碗・片口鉢Ⅰ類の再分類を行っており、豊富な図面を示して解説する。一連の発表で各型式の分類上の着眼点が整備された点や、それが第三者にも分かり易い形で提示された意味は大きいと思う。
- 2 新井堀の内遺跡の時期は、陶磁器の出土量が少なく、個々の遺構の時期を絞り込むのが難しい（末尾の組成表参照）。城館としての終焉は、建物ピット・地下式坑から鉄釉椀皿が出土しており、16 世紀後葉に降る。さらに堀や井戸の遺物には確実に 17 世紀前葉のものが含まれており、引き続き遺跡内の土地利用を示唆する。一方で、古瀬戸後Ⅱ期の平碗がほぼ遺存して出土した井戸もあり、かわらけの中にも大型・薄手のものがみられるなど、14 世紀末～15 世紀代を中心とした遺構の存在も否定し難い。遺跡の中心部ではなかったかもしれないが、14 世紀後葉～16 世紀にわたり断続的な土地利用があったと推定している。
- 3 最大径 80cm という数字は便宜的なものであるが、第 3 図に示したような常滑焼のサイズの傾向を鑑みれば、大小の大甕（L・R）を区別するには概ね有効な数字と思われる。
- 4 型式については、註 1 に記した中野および山本が分類・図示した図面と報告書の図面を対照しながら、筆者が判断した。そのため、報告書の記載と異なる場合がある。また、一部は筆者が以前示した甕棺墓の集成表（村山 2008）を訂正した場所がある。
- 5 もっとも、常滑焼は破片として出土することが多いから、実際には関東各地に運ばれた常滑焼は膨大な量に上る。例えば、本稿で扱っている新井堀の内遺跡（調査面積約 1,800㎡）の場合、全体が復元できた甕は「甕 A・B」の二点のみであった。ほかに口縁部から頸部にかけて反転復元できた資料が 1 点あったが、反転復元し得ない破片数は 69 点に及ぶ（参考：新井堀の内遺跡の陶磁器・土器類の組成表

ながら、引き続き検討を進めていきたい。

を末尾（表 4）に示した）。

近年報告された埼玉県加須市宮東・宮西遺跡（調査面積約 16,700㎡）でも遺物のカウントを実施した。それによれば遺構内から出土した常滑焼の破片は計 260 点（甕以外も含む）であるが、このうち全体を復元し得た甕は無く、肩部以下まで復元図示できたものは 1 点に過ぎない（埼玉県埋文事業団 2022『宮西Ⅱ／宮東Ⅱ』）。

このように、復元可能な常滑焼甕は、当時搬入された甕のごく一部であることに注意が必要だろう。しかし、第 1 表に示したように、常滑焼甕類の中に占める「大甕 L」の比率が少数に留まることは揺るがないと思われる。

- 6 鎌倉地域で複数の埋設甕を用いたと思われる例は極めて稀で、杉本寺遺跡周辺遺跡に 4 基分の播鉢状土坑が連なる例があり、一部に甕が遺存していた（杉本寺周辺遺跡発掘調査団 2002）。鎌倉から多数検出される「播鉢状ピット」をどのように理解するかという問題もある（田畑 1992）が、浅野晴樹が指摘するように、東国の据甕遺構には西国の「甕倉」のような形態は稀と言える（浅野 2020）。
- 7 川を船がどこまで遡り得たかは、整備された現在の川の情報から導き出すのは難しい。近世の利根川舟運にみられる艀船は曳船が多く、堤防など河川の整備状況が問題である（齋藤善之 2003）。季節や大水による水量にも船の航行は左右される（齋藤慎一 2010・築瀬 2015）。条件によっては海船でも水深四・五尺で川を遡航し得ると言い（春名 1995）、水量の多い下流域ではそのまま船が入ってきた可能性が高い。明治期における舟運は、入間・越辺川合流点付近まで高瀬船・艀船・茶船等による航行があったらしく（川名 2003）、より上流には小舟の遡航が想定し得る。なお、江戸幕府川船奉行所によって作成された『船鑑』では、茶船などの小型川舟の上口（全長）が 22～25 尺程度とされる（川名 2013）。物資の輸送ではなく雑多な用途であろうが、荒川流域の伝世例で長さ 4.6 m や 4.9 m の小舟の報告例がある（高木文夫・松田哲洋 2008『荒川水系の川船と船大工』

『利根川文化研究』32)。

- 8 堂山下遺跡から川の対岸・鳩山町今宿には近世に河岸があるが、新編武蔵風土記稿にあるように上流の木材流通に関わる筏河岸である。とは言え河川交通に関わる河岸の存在は気になるところである。
- 9 内陸から出土する全ての常滑焼大甕が、限られた川津に集積されたと考えているのでは無い。既に浅野によって指摘されているように、常滑焼の破片は内陸各所の遺跡から出土し、必ずしも河川交通との関連だけでは理解できない(浅野 1995a.b・2020)。ここでは再度、「大甕 L」の特殊性を指摘し、そのサイズ・重量・希少性から本論のような流通経路が想

定されることを確認しておく。一方で、一回り小さな「大甕 R」がどのような経路で内陸に流通したかは、別途検討の必要があるだろう。

- 10 もちろん、備前福岡の市は生産地に近く、備前焼が主要な商品であっただろう。地方消費地においては陶器甕の扱う量はずっと少なかったはずであり、より貴重な商品だったに違いない。

(謝辞) 文献の入手にあたっては、赤井博之氏・太田まり子氏・新垣清隆氏・野口達郎氏の協力を得た。記して感謝します。

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史 別編 窯業 3』(中世・近世 常滑系)
- 青木文彦 2021 「武蔵の奥大道」『奥大道 中世の関東と陸奥を結んだ道』高志書院
- 赤羽一郎 1984 『常滑焼』(考古学ライブラリー 23) ニューサイエンス社
- 浅野晴樹 1981 「埼玉県出土の中世陶器(1)」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第3号
- 浅野晴樹 1995a 「東国の常滑焼の出土状況」『常滑焼と中世社会』小学館
- 浅野晴樹 1995b 「陶磁器からみた物流」『中世東国の物流と都市』山川出版社
- 浅野晴樹 2020 『中世考古学〈やきもの〉ガイドブック』新泉社
- 浅野晴樹・佐藤春生 2022 「総括～鎌倉街道上道的重要性～」『鎌倉街道上道総括報告書』毛呂山町教育委員会
- 新井浩文 2011 「第3部 関宿と利根川水運」『関東戦国期領主と流通』岩田書院
- 岩槻市遺跡調査会 2002 『府内三丁目遺跡』
- 岩槻市史編さん室 1985 『岩槻市史』通史編
- 上野真由美 2021 「埼玉県新井堀の内遺跡の埋蔵銭」『研究紀要』35 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 内山俊身 1995 「戦国期梁瀬氏城下水海の歴史的位置・栗橋乗と関宿城の機能を中心に」『『そうわの文化財』4(『旧国中世重要論文集成 下総国』2019 戎光祥出版に再録)
- 江口桂 1996 「多摩川流域における常滑焼大甕について」『土曜考古』20
- 遠藤忠 1982 「古利根川の中世水路関」『八潮市史研究』4
- 荻野繁春 1992 「壺・甕はどのように利用されてきたか」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集
- 小高春雄 「千葉県下の大量出土銭」『出土銭貨』16 2001
- 落合義昭 2005 「武蔵国河越館の景観と変遷」『中世東国の「都市的な場」と武士』山川出版社
- 春日部市教育委員会 1994 『春日部市史』第6巻 通史編1
- 川越市教育委員会 2015 『河越館跡史跡整備(第2期整備)に伴う発掘調査』
- 川名登 2003 『近世日本の川船研究』(上)日本経済評論社
- 川名登 2013 「関東川船の支配と構造」『船鑑』(船の科学館選書7)
- 河野真知朗 2005 『中世都市鎌倉』講談社学術文庫
- 小金井誌史編さん委員会 1970 『小金井市誌』Ⅱ歴史編
- 小坂登志江・和田哲 2012 「八王子市横川町出土の常滑焼大甕」『多摩考古』42号 多摩考古学会
- 埼玉県 1982 『埼玉県史』資料編5 中世1・古文書I

- 埼玉県 1987 『荒川 人文Ⅰ - 荒川総合調査報告書2-』
- 埼玉県 1988 「第5章 中世武蔵の社会と生活」『埼玉県史』通史編2 中世
- 埼玉県教育委員会 1990 『元荒川の水運』（歴史の道調査報告書第13集）
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994 『金井遺跡B区』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2004 『戸宮前／在家／宮廻』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2008 『宮廻館跡Ⅱ』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2020 『新井堀の内遺跡』
- 斉藤善之 2003 『海の道・川の道』（日本史リブレット47）山川出版社
- 齋藤慎一 2010 「河川水量と渡河」『中世東国の道と城館』東京大学出版会
- 坂戸市教育委員会 1996 『中世の坂戸』
- 佐藤春生 2016 「鎌倉街道上道と渡河点周辺の中世遺跡」『鎌倉街道の風景 発掘でよみがえる埼玉の中世』（埼玉考古別冊10）埼玉考古学会
- 品川歴史館 1993 『海に開かれたまち』（平成5年度特別展図録）
- 品川歴史館 2008 『東京湾と品川』（平成20年度特別展図録）
- 白石祐司・村山卓 2011 「平塚市博物館所蔵の常滑焼大甕 - 酢甕として用いられた中世の常滑焼 -」『品川歴史館紀要』第26号
- 菅原正明 1992 「甕倉出現の意義 - 中世経済の一側面 -」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集
- 杉本寺周辺遺跡発掘調査団 2002 『杉本寺周辺遺跡 二階堂字杉本912番1ほか地点 発掘調査報告書』
- 鈴木哲夫 2005 「古墨田川地域史における中世的地域構造」『中世関東の内海世界』岩田書院
- 谷口榮 1991 「品川歴史館所蔵の常滑大甕」『品川歴史館紀要』第6号
- 田畑佐和子 1992 「やぐら内に掘られた播鉢状ピットについて」『中世都市史研究』第2号
- 玉利秀雄 1984 「若葉台遺跡と周辺の古道 - 鎌倉街道調査を中心に -」『鶴ヶ島研究Ⅰ』鶴ヶ島市史市史編さん室
- 千葉市史料研究財団 1998 『千葉県の歴史』資料編 中世Ⅰ（考古資料）
- 千葉市文化財保護協会 1997 『千葉市高品城跡Ⅰ』
- 千葉市立郷土博物館 2009 『千葉の戦国時代城館跡』（平成21年度企画展図録）
- 柘植信行 1990 「都市形成と儀礼域の変容」『都市周辺の地方史』雄山閣
- 柘植信行 1991 「中世品川の信仰空間」『品川歴史館紀要』第6号
- 柘植信行 2009 「品川の中世史研究の現在 - 特別展「東京湾と品川 - よみがえる中世の湊町 -」を開催して -」『品川歴史館紀要』第24号
- 永井晋 編 2010 『金沢北条氏領下総国下河辺庄の総合的研究』（平成19年度～21年度科学研究補助金基盤研究（c）研究成果報告書）
- 中野晴久 1994 「赤羽・中野「生産地における編年」について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』
- 中野晴久 1995 「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中野晴久 1995 「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
- 中野晴久 2005 「常滑・渥美系」『中世窯業の諸相 - 生産技術の展開と編年 -』発表要旨
- 中野晴久 2018 「窯式編年の有効性と限界について」『東海窯業史研究論集Ⅰ』東海窯業史研究会
- 中野晴久 2022 「東海諸窯」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 永原慶二編 1995 『常滑焼と中世社会』小学館
- 日本福祉大学知多半島総合研究所 1994 『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』
- 八王子市史編集委員会 2014 『新八王子市史』資料編2 中世
- 英太郎 1986 「府中宮町出土の常滑焼大甕について」『府中市立郷土館紀要』第12号
- 春名徹 1995 「海運と船」『常滑焼と中世社会』小学館

日野市栄町遺跡調査会 1995 『日野市栄町遺跡』

藤澤良祐・山本智子・小山美紀 2015 「付編 中世常滑窯編年の再検討－5 型式以降を中心に－」『上県 2 号窯跡』
愛知学院大学文学部歴史学科

府中市教育委員会 1996 『武蔵国府関連遺跡調査報告書 17』

府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2001 『武蔵国府の調査 19』

船橋市郷土資料館 2002 『中世の船橋』（平成 13 年度企画展図録）

松伏町教育委員会 2021 『松伏町史 資料編 原始・古代・中世』

峰岸純夫・村井章介編 1995 『中世東国の物流と都市』山川出版社

峰岸純夫 1995 「中世東国水運史研究の現状と課題」『中世東国の物流と都市』山川出版社

宮瀧交二 1995 a 「東国における常滑焼の流通と消費」『常滑焼と中世社会』小学館

宮瀧交二 1995 b 「中世東国における陶磁器の流通と海上・河川交通」『中世東国の物流と都市』山川出版社

武蔵村山市立歴史民俗資料館 2006 『特別展解説書 むらやまの中世 - 市内に残る板碑と中世陶器 -』

村山卓 2006 「千葉県佐原市光福寺所蔵の常滑焼大甕」『立正史学』第 99 号

村山卓 2008 「中世葬制転換期における甕棺墓の位置付け」『多知波奈の考古学』

村山卓 2022 「東松山市・常安寺の中世瓦と類例」『埼玉考古』57

毛呂山町教育委員会 2001 『堂山下遺跡（範囲確認調査・発掘調査）鎌倉街道 B 遺跡』

毛呂山町教育委員会 2013 『堂山下遺跡 - 第 2 次発掘調査報告書 -』

八潮市史編さん委員会 1989 『八潮市史』通史編

築瀬大輔 2015 「国境河川地域の政治と文化」『関東平野の中世』高志書院

築瀬裕一 2008 「中世後期の常滑焼片口鉢の編年について」『芹沢長介先生追悼 考古・民俗・歴史学論叢』

築瀬裕一 2004 「房総の中世集落」『中世東国の世界 2』高志書院

山田義高 1994 「伝・屋敷山出土の大甕」『武蔵村山市歴史民俗資料館報 資料館だより』第 20 号

綿貫友子 1989 「「武蔵国品川湊船」をめぐって」『史艸』30 日本女子大学

第1表 茨城県・千葉県・埼玉県・東京都の甕

地域	遺跡名	遺構	口径	最大径	型式	備考	文献
茨城 1	石岡市要害山 3 号墳	採集	36.6	61.2	5	経塚・外容器か	橋場君男「雷電山古墳出土の経塚遺物について（下）」『玉里村立史料館報』vol 3 1998
茨城 2	茨城町奥谷遺跡	1 号堀覆土	36.9	63.0	9		茨城県教育財団『一般国道 6 号改築工事内埋蔵文化財調査報告書』1989
茨城 3	茨城町奥谷遺跡	1 号堀覆土	39.9	58.0	6a		茨城県教育財団『一般国道 6 号改築工事内埋蔵文化財調査報告書』1989
茨城 4	鹿嶋市厨台遺跡群	SK154	50.0	68.5	8	地下式坑覆土中層	鹿嶋市文化スポーツ振興事業団『鹿島神宮駅北部文化財調査報告XⅦ』
茨城 5	桜川市門毛経塚	偶発	43.2	71.8	3		阿久津久「門毛経塚と中世遺物」『茨城県立歴史館報』12 1985 奈良国立博物館『関東・北陸地方に埋納されたやきもの』（特別陳列経塚出土陶磁展 3）1997
茨城 6	下妻市山尻遺跡	偶発	47.8	76.2	8		佐久間秀樹・藤田美紀・大関武「下妻市山尻遺跡出土の中世陶器」『博物館研究紀要』第 1 号 1998 下妻市ふるさと博物館
茨城 7			49.0	70.2	10		
茨城 8	那珂市堀之内館跡	内郭 P 4	29.0	54.0	6a~7	井戸跡の可能性	国道三九四号遺跡調査会『常陸堀之内遺跡』1976
茨城 9	行方市大麻古墳群	1 号墳墓	32.0	54.0	9		麻生町教委『大麻古墳群発掘調査報告書』1988
茨城 10	水戸市岡田古墳群	第 2 号溝跡	42.4	60.0	7		茨城県教育財団『岡田古墳群・稲荷宮遺跡』2005
茨城 11		第 2 号溝跡	42.4	66.0	9		
茨城 12	稲敷市馬掛備蓄銭	偶発	46.0	77.0	8	一括出土銭容器 洪武通寶最新	大塚淳「茨城県阿見町の掛馬備蓄銭」『出土銭貨』8 1997
茨城 13	竜ヶ崎市長峰城跡	溝底部	40.5	60.0	11		茨城県教育財団『長峰城跡』2002
茨城 14	竜ヶ崎市屋代 B 遺跡	869 号土坑	43.0	53.0	10	地下式坑	茨城県教育財団『屋代 B 遺跡Ⅲ』1988
千葉 1	市原市国分寺台遺跡	不詳	42.6	68.0	7		山田友治「房総における中世の焼物について（2）」『史館』第 6 号 1977
千葉 2	市原市根田 130 号墳	土坑中	42.5	60.7	6a	甕棺墓	市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査会『上総国分寺台発掘調査概報』1980
千葉 3	市原市台遺跡	E 地点 473 号遺構	-	65.5	6a~6b	甕棺墓 年代は報告書によった	市原市埋蔵文化財センター『市原市台遺跡 E 地点』2017
千葉 4		E 地点 473 号遺構	41.4	63.0	9	甕棺墓	
千葉 5		E 地点一括	27.5	53.0	10		
千葉 6		A 地点 303 号遺構	42.0	60.0	10	地下式坑	市原市埋蔵文化財センター『市原市台遺跡 A・D 地点』2014
千葉 7		A 地点 392 号遺構	41.2	60.0	6a~b	甕棺墓	
千葉 8		一括	40.4	60.8	6a		
千葉 9	市原市山倉 1 号墳	1 号土坑墓	48.8	65.8	4	甕棺墓	市原市文化財センター『上総国分寺台遺跡報告書Ⅺ』2004
千葉 10	印西市小林城	SK103	39.0	60.0	7~8	地下式坑埋土	千葉県文化財センター『印西町小林城跡』1994
千葉 11		土塁 C	-	99+	不明		
千葉 12	香取市大崎城	E-4,F-4	35.0	57.5	7		香取郡市文化財センター『大崎城跡』2001
千葉 13		G-10,G-11	37.0	62.0	10		

地域	遺跡名	遺構	口径	最大径	型式	備考	文献
千葉 14	香取市台遺跡	墓域	40.0	65.5	5		香取郡市文化財センター『主要地方道成田小見川鹿島港線 - 沢 工区の埋蔵文化財発掘調査報告書 -』1999
千葉 15		墓域 9 号遺構	45.0	63.0	6a		
千葉 16		墓域 1 号遺構	43.0	69.5	3		
千葉 17		墓域	41.5	64.0	7		
千葉 18	香取市仁井宿東遺跡	SD2	37.0	55.9	10~11		千葉県文化財センター『佐原市仁井宿東遺跡・牧野谷中田遺跡』1990
千葉 19	鎌ヶ谷市根郷貝塚	甕棺墓	39.9	61.5	5~6a		鎌ヶ谷市教委『千葉県鎌ヶ谷市根郷貝塚発掘調査報告書』1988・山田友治「根郷貝塚出土の蔵骨器について」『鎌ヶ谷市史研究』2 1989
千葉 20		甕棺墓	46.5	65.0	5		
千葉 21		甕棺墓	41.9	65.0	4		
千葉 22	木更津市笹子城跡		40.0	58.8	11		千葉県文化財センター『東関東自動車道（千葉富津線）埋蔵文化財調査報告書 14（木更津市笹子城跡）』（財団法人千葉県文化財センター調査報告 486 集）2004
千葉 23	木更津市天神前遺跡	第 6 号墓	47.0	46.5	5~6a		君津郡市文化財センター『天神前遺跡』1991
千葉 24	木更津市真理谷城跡	地下式坑	44.0	53.2	10		木更津市教育委員会『真理谷城跡発掘調査報告書』1984
千葉 25	君津市外箕輪遺跡	SE1	37.4	60.5	4	復元	財団法人千葉県文化財センター『君津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳 発掘調査報告書』1989
千葉 26	佐倉市神門房下遺跡	C 地点 145 号土坑上面	35.1	54.3	7		印旛郡市文化財センター『神門房下遺跡 C 地点』
千葉 27	芝光町篠本城	5 F-13-10	45.7	74.0	6b		財団法人東総文化財センター『篠本城跡・城山遺跡』2000
千葉 28		5 号堀	46.2	69.4	6b		
千葉 29		5F-25-21	40.0	57.5	8		
千葉 30		30 号地下式坑	43.0	61.0	10		
千葉 31		3 号水場	43.4	64.0	10		
千葉 32	芝山町金光寺廃寺	偶発	48.5	60.0	5		山田友治「房総における中世の焼物について（2）」『史館』第 6 号 1976
千葉 33	芝山町田向城跡	Ⅱ郭 0 0 1 掘立柱建物跡	27.2	51.6	10~11		山武郡市文化財センター『山武郡市文化財センター発掘調査報告書 21：田向城跡』1994
千葉 34	千葉県佐原市光福寺	伝世	39.9	59.0	9		村山卓「千葉県佐原市光福寺所蔵の常滑焼大甕」『立正史学』99 号 2009
千葉 35	千葉市生実城跡	4 F 区 59 号土壇	45.9	54.0	11		千葉市教育委員会・千葉氏文化財調査協会『千葉市生実城跡』2002
千葉 36	千葉市高品城	34 号土壇	54.0	90.5	9		千葉市文化財調査協会『千葉市高品城跡 I』1997
千葉 37		23 号地下式坑	56.0	75.6	9	地下式坑	
千葉 38	千葉市廿五里城跡	塚	40.6	60.0	9~10	継ぎ痕跡	千葉県文化財センター『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1986
千葉 39	流山市加地区遺跡	49 号台地整形遺構	40.5	60.5	9		流山市教育委員会『加地区遺跡群Ⅳ』2000
千葉 40	群町畑遺跡	覆土	48.5	76.8+	10~11		

地域	遺跡名	遺構	口径	最大径	型式	備考	文献
千葉 41	富津市植ノ台遺跡	中世墓	39.4	56.0	10・11	時期要確認	君津都市文化財センター『植ノ台遺跡』1991
埼玉 1	加須市宮西遺跡	SE125	49.0	70.0	5		埼玉県埋文事業団『宮西Ⅱ／宮東Ⅱ』2022
埼玉 2	川越市宮廻館跡	B区第54号土坑	56.0	100.0	8		埼玉県埋文事業団『戸宮前／在家／宮廻』2004
埼玉 3	久喜市小草原遺跡	偶発	46.0	66.0	8	甕棺墓	栗橋町教育委員会『栗橋町史』第3巻 2008
埼玉 4	熊谷市諏訪木遺跡	E区第1号井戸	44.5	68.8	5	井筒に転用	埼玉県埋文事業団『諏訪木遺跡Ⅲ』2008
埼玉 5	熊谷市妻沼経塚	第4号経塚	41.0	77.0	2~3	経塚外容器	熊谷市史編さん室『熊谷市史 資料編1 考古』2015
埼玉 6	熊谷市若松遺跡	1号土葬墓	50.6	79.6	8~9	甕棺墓	熊谷市教育委員会『三尻遺跡群 若松遺跡・黒沢遺跡・東遺跡』1986
埼玉 7	鴻巣市屈巢	偶発	36.9	57.2	9	一括銭容器 咸淳元寶 最新	川里村教育委員会『川里村史』資料編1 1994
埼玉 8	さいたま市道場寺寺院跡	25号土壇	46.0	74.0	10	甕棺墓	浦和市遺跡調査会『道場寺跡跡・大久保領家遺跡（第6次）発掘調査報告書』1998
埼玉 9	坂戸市永源寺	偶発	57.0	97.0	8		浅野 1981・本書実測図参照
埼玉 10	所沢市山口城跡	KL-4	54.0	105.5?	8	復元径が不自然	所沢市教委『山口城跡 第8次調査』2002
埼玉 11	蓮田市新井堀の内遺跡	第1号埋蔵銭	51.4	92.6	9	一括銭容器	埼玉県埋文事業団『新井堀の内遺跡』2020
埼玉 12		第3号埋蔵銭	59.2	96.0	9	一括銭容器	
埼玉 13	鳩ヶ谷市三ツ和遺跡近隣 八幡木 2-9-16 他	第1号井戸跡	47.4	69.2	渥美		鳩ヶ谷市教委『三ツ和遺跡他3遺跡』2004
埼玉 14	羽生市屋敷裏遺跡	49号土坑	41.9	60.5	6b		埼玉県埋文事業団『屋敷裏遺跡』2016
埼玉 15		49号土坑	42.8	62.4	6a		
埼玉 16	毛呂山町堂山下遺跡	平成8年度試掘調査 SX1 第2次調査 10号土坑	55.0	85.2	8	竪穴遺構内の据甕	毛呂山町教育委員会『堂山下遺跡（範囲確認調査・発掘調査） 鎌倉街道 B 遺跡』2001 毛呂山町教育委員会『堂山下遺跡 - 第2次発掘調査報告書 -』2013
埼玉 17	吉見町金蔵院	永和二年銘宝篋印塔下	43.0	67.9	渥美		太田賢一「吉見町安楽寺と周辺遺跡」『東国武士と中世寺院』高志書院 2008
東京 1	板橋区舟渡遺跡第3地点	第11号井戸跡	44.0	63.0	6b	型式は接合しない同一個体の口縁部から判断	板橋区舟渡二丁目遺跡調査会『舟渡遺跡第3地点発掘調査報告書』2000
東京 2	葛飾区立石遺跡	3区 12号溝	41.8	56.4	6b		葛飾区遺跡調査会『立石遺跡』Ⅳ 1994
東京 3	小金井市貫井南町三丁目	偶発	51.0	83.0	6b-7		小金井誌史編さん委員会『小金井誌史Ⅱ 歴史編』1970
東京 4	品川区御殿山	伝世	58.4	94.0	9		
東京 5	世田谷区喜多見陣屋遺跡	2号溝	48.0	71.0	5		喜多見陣屋遺跡調査会『喜多見陣屋遺跡Ⅲ』1996
東京 6	台東区浅草寺遺跡 浅草寺病院地点	第4号遺構	42.5	63.0	6a	井戸跡か	台東区文化財調査会『浅草寺遺跡 浅草寺病院地点』2001
東京 7	八王子市多摩ニュータウンNo.	A区1層	43.1	55+	5		東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡平成3年度（第1分冊）』1993
東京 8	405	B群建物跡周辺	45.8	64.6	9		

地域	遺跡名	遺構	口径	最大径	型式	備考	文献
東京 9	八王子市多摩 ニュータウンNo. 692	A 区 36S14 土坑外	48.0	75.0	2~3		東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡昭和 61 年度（第 2 分冊）』1988
東京 10		5 号井戸ほか	45.5	70.0	2~3	5 号井戸・17 号焼土跡・6 号集石・C 区 P 8・C 区 19～29-E～L 2 層ほか	
東京 11		B 区 36J.K 層	39.0	51.0	2~3		
東京 12	八王子市多摩 ニュータウンNo. 799	7 号地下式坑・21 号土坑	33.2	59.5	10		東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡昭和 59 年度（第 3 分冊）』1986
東京 13	八王子市八王子城跡		64.0	80.0	12		数値は江口 1996 の図面から計測
東京 14	八王子市横川町	偶発	60.0	98.0	8	逆位で出土	小坂登志江・和田哲「八王子市横川町出土の常滑焼大甕」『多摩考古』42 号 2012 八王子市史編集委員会『新八王子市史』資料編 2 中世 2014
東京 15	日野市栄町遺跡	L 地区 20 号土坑	55.4	90.0	8	据囊状遺構	日野市栄町遺跡調査会『日野市栄町遺跡』1994
東京 16	日野市栄町遺跡	I 地区 1.3.60 号土坑・1 号竪穴遺構・684pit	38.6	58.8	6a		日野市栄町遺跡調査会『日野市栄町遺跡』1995
東京 17	府中市武蔵国府 関連遺跡群	M48-SX6	40.0	58.0	8	一括出土銭容器	府中市教育委員会・府中市遺跡調査会『武蔵国府の調査 19』2001
東京 18		M48-SX7	46.5	66.7	9	一括出土銭容器	
東京 19		N51-SZ9	50.6	90.6	6b	甕棺墓	
東京 20		M88-SX144	52.8	76.5	9		府中市教委・府中市遺跡調査会『武蔵国府関連遺跡調査報告 33』2004
東京 21		M59-SZ18	46.8	68.2	5	土坑下層埋設、報告書は甕棺墓	府中市教委・府中市遺跡調査会『武蔵国府関連遺跡調査報告書 17』1996
東京 22		M59-SZ14	57.5	93.2	9~10	地下式横穴、ひび割れを漆で補修。報告書は甕棺墓。	
東京 23		M59-SZ6	-	61.2	5~6a か	土坑下層埋設、報告書は甕棺墓	
東京 24		M73-SX111	45.2	67.0	5		府中市教委・府中市遺跡調査会『武蔵国府関連遺跡調査報告 16』1999
東京 25	府中市定光寺跡	偶発	32.4	56.0	渥美		深澤靖幸「武蔵府中定光寺とその周辺」『府中市郷土の森紀要』第 5 号 1992
東京 26		偶発	33.3	46.9	5		
東京 27		偶発	52.0	72.9	5		
東京 28		偶発	42.0	61.8	6a		
東京 29	府中市宮町 2-21	偶発	57.0	100.0	9		英太郎「府中宮町出土の常滑焼大甕について」『府中市立郷土館紀要』第 12 号 1986
東京 30	町田市大久保遺跡	板碑集中遺構	46.0	71.4	10		鶴川第二地区遺跡調査会『真光寺・広袴遺跡群 V』1991
東京 31	武蔵村山市屋敷山遺跡	偶発	53.6	84.6	9		山田義高「伝屋敷山出土の大甕」1994

第2表 鎌倉地域の大甕

地域	遺跡名	遺構	口径	胴部径	型式	備考	文献
鎌倉 1	朝比奈砦 鎌倉市十二所字関ノ上 310-1 の一部他	納骨穴	48.0	88.0	8	蔵骨器	鎌倉市教委『朝比奈砦発掘調査報告書』2002
鎌倉 2	今小路西遺跡 御成小学校内地点平成元年度試掘・確認調査	T-2 常滑据甕	59.5	97.2	8		今小路西遺跡発掘調査団編『今小路西遺跡（御成小学校内）平成元年度試掘及び確認調査概報』1990
鎌倉 3	今小路西遺跡 御成町 176-7	一面据甕 1	55.0	87.2	8	据甕遺構	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29』2013
鎌倉 4	今小路西遺跡 御成町 200-2	土坑 6	50.0	72.5	6b		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22』2004
鎌倉 5		池 3	40.0	73.2	6b		
鎌倉 6	今小路西遺跡 由比ガ浜一丁目 141-5 外	1 号ピット	20.0	40.8	6b~7		玉川文化財研究所『今小路西遺跡発掘調査報告書』2007
鎌倉 7	今小路西遺跡 由比ガ浜一丁目 163-1	遺構 477	56.5	92.0	8	据甕遺構	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 37』2021
鎌倉 8	今小路西遺跡（御成小学校内）	東外周部一面	45.5	77.0	6a		今小路西遺跡発掘調査団『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』1990
鎌倉 9		南谷一面 4 区土坑 1	49.8	80.0	6a		
鎌倉 10		南谷二面	-	79.0	6b		
鎌倉 11		南谷二面	36.0	52.5	6a		
鎌倉 12		北谷三面屈曲溝 1	47.5	76.0	6b		
鎌倉 13		北谷三面屈曲溝 2、方形土壇	39.0	58.0	6a		
鎌倉 14		南谷三面	55.0	75.5	6b~7		
鎌倉 15		南谷四面・三面	36.5	53.4	6a		
鎌倉 16	円覚寺続燈庵	第二次調査段状遺構南東側地業土	37.2	58.5	10	復元	続燈庵境内遺跡発掘調査団『円覚寺続燈庵』1990
鎌倉 17	円覚寺門前遺跡 山内字松岡 1323・1 1338・2	据甕遺構 1	39.6	55.0	9	据甕遺構	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 36』2020
鎌倉 18		3 面溝状遺構 3	22.0	36.0	6b		
鎌倉 19	大蔵幕府周辺遺跡 雪ノ下三丁目 648-3	土坑 16	42.0	6.05	7	肩以上 1/4	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 35』2019
鎌倉 20		土坑 16	41.0	63.0	7	肩以上 1/4	
鎌倉 21		三面据甕遺構 1	51.2	89.0	9	据甕遺構	
鎌倉 22	大蔵幕府周辺遺跡群 二階堂字荏柄 58-4 外	P45	33.6	53.4	4	ピット	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18』2002
鎌倉 23	大蔵幕府周辺遺跡群 雪ノ下三丁目 704-3 外	4 面構成土	41.6	62.8	5		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27』2011
鎌倉 24		7 面	44.8	66.0	5		

地域	遺跡名	遺構	口径	胴部径	型式	備考	文献
鎌倉 25	大蔵幕府周辺遺跡群 二階堂字荏柄 27-3	二面土壇 15	38.0	59.5	4		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22』2006
鎌倉 26	公方屋敷跡 浄明寺三丁目 143-2	二面上	41.2	47.0	6a		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10』1994
鎌倉 27		二面上	33.2	58.0	6a		
鎌倉 28	下馬周辺遺跡 由比ヶ浜二丁目 107-1	溝 4	35.4	53.4	8		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13』1997
鎌倉 29	下馬周辺遺跡 由比ヶ浜二丁目 1075 外	35 号竪穴	56.0	92.0	9	竪穴建物内の床面に埋設	かながわ考古学財団『下馬周辺遺跡』2014
鎌倉 30	光明寺裏遺跡 材木座 846 番地 材木座北区立鎌倉学園用地内	-	49.8	100.0	9		北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団『光明寺裏遺跡』1980
鎌倉 31	極楽寺旧境内遺跡・馬場ヶ谷やぐら	I 区 2 面	43.2	66.5	5		かながわ考古学財団『極楽寺旧境内遺跡・馬場ヶ谷やぐら』2009
鎌倉 32	極楽寺旧境内内やぐら 極楽寺四丁目	2 号窟	54.8	91.8	6b		東国歴史考古学研究所『中世石窟遺跡の調査 - 鎌倉所在の『やぐら』群 -』1996
鎌倉 33			69.1	100.0	7		
鎌倉 34	五合榎遺跡	B 区二段目調査区	54.2	80.8	8		
鎌倉 35	小町大路東遺跡 大町一丁目 1147	遺構 115	48.8	53.2	6b	据裏遺構	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 35』2019
鎌倉 36	笹目遺跡 笹目町 302-5	土坑 14	26.0	38.5	6a		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11』1995
鎌倉 37	笹目やぐら 笹目町 324 311-3		39.5	58.5	9		田畑佐和子「やぐら内に掘られた播鉢状ビットについて」『中世都市史研究』2 1992
鎌倉 38	佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目 450-24	2 面	38.1	64.0	6a		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14』1998
鎌倉 39	佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目 476- 1 地点	土坑 8	52.9	92.4	7	復元	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20 平成 15 年度発掘調査報告書』（第一分冊）2004
鎌倉 40	釈迦堂遺跡 浄明寺字釈迦堂 621 その他	地業層	24.4	56.6	7		浄明寺釈迦堂ヶ谷津発掘調査団『浄明寺釈迦堂ヶ谷津』1990
鎌倉 41	浄光明寺境内		55.3	95.5	8		宮田眞「経塚の発掘」『浄光明寺敷地絵図の研究』新人物往来社 2005
鎌倉 42	浄智寺下遺跡 山内字金宝山 1429		58.2	97.8	7	一括銭容器、永楽通寶最新	鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』1983
鎌倉 43	推定藤内貞員邸跡 小町一丁目 309-5	83 土壇	47.0	76.2	7	据裏遺構	(推定) 藤内貞員邸跡発掘調査団『小町一丁目 309 番地 5 地点発掘調査報告』1983
鎌倉 44	推定藤内貞員邸跡 小町一丁目 309-5	第 6 井戸	46.4	74.0	5		(推定) 藤内貞員邸跡発掘調査団『小町一丁目 309 番地 5 地点発掘調査報告』1983
鎌倉 45			53.0	69.0	渥美		
鎌倉 46	推定藤内定員邸跡 小町一丁目 309-5	83 土壇	47.0	76.2	6b		(推定) 推定藤内定員邸跡発掘調査団『推定藤内定員邸跡 小町一丁目 309 番 5 地点発掘調査報告書』1983
鎌倉 47		6 井戸	46.4	74.0	5		
鎌倉 48			53.0	69.0	渥美		

地域	遺跡名	遺構	口径	胴部径	型式	備考	文献
鎌倉 49	杉本寺周辺遺跡 二階堂字杉本 912 番 1 ほか	1 面建物 6	49.0	85.5	8	据襲遺構	杉本寺周辺遺跡発掘調査団『杉本寺周辺遺跡 二階堂字杉本 912 番 1 ほか地点 発掘調査報告書』2002
鎌倉 50		1 面据襲	56.0	85.5	8	据襲遺構	
鎌倉 51		1 c 面遺物集中	35.2	43.0	6a		
鎌倉 52			51.8	73.0	6a		
鎌倉 53		2 面上炭化層	54.0	70.2	渥美		
鎌倉 54		2 面井戸 3	47.2	78.5	6b		
鎌倉 55		3 面堀 1	41.0	56.4	5		
鎌倉 56	諏訪東遺跡 御成町 806 番 - 5 他	第 1 号方形建築址	48.0	78.0	7		諏訪東遺跡調査委員会『諏訪東遺跡』1985
鎌倉 57	瀬戸町やぐら群第 5 号やぐら（横浜市）	第 5 号やぐら第 1 号土壇	57.0	87.6	8	甕棺墓	かながわ考古学財団『瀬戸町やぐら群・横穴墓』2000
鎌倉 58	宅間谷東やぐら	崖下遺構群 1 号土壇覆土上層	51.0	77.5	6b	屋敷地	かながわ考古学財団『宅間谷東やぐら群』2007
鎌倉 59	宅間谷東やぐら	1 号やぐら上層	55.8	100.5	9	やぐら	かながわ考古学財団『長谷大谷やぐら群』2010
鎌倉 60			65.2	105.6	9~10	やぐら	
鎌倉 61		1 号やぐら中層	66.0	101.2	9	やぐら	
鎌倉 62			54.0	92.8	9	やぐら	
鎌倉 63	千葉地遺跡 御成町 15-5	3 面	39.2	56.8	6a		千葉地遺跡発掘調査団『千葉地遺跡』1983
鎌倉 64		2 面	36.6	60.4	6b		
鎌倉 65		203 号土壇	39.5	59.4	6b		
鎌倉 66		219 土壇	43.8	62.5	6b		
鎌倉 67		4 面	40.5	70.4	5		
鎌倉 68		3 面南溝	46.7	98.0	7		
鎌倉 69	鶴岡八幡宮境内 研修道場用地		54.0	94.2	7	復元	研修道場用地発掘調査団・鶴岡八幡宮『研修道場用地発掘調査報告書』1983
鎌倉 70			52.0	75.0	6a	復元	
鎌倉 71			49.0	77.4	6a	復元	
鎌倉 72			40.0	64.8	5	復元	
鎌倉 73			43.0	73.8	6a	復元	
鎌倉 74			-	67.8	不明		
鎌倉 75	田楽辻子周辺遺跡 浄明寺一丁目 590-2	Ⅱ区 5 b 面下土坑 1	41.6	61.0	6a	上位 1/3	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 35』2019

地域	遺跡名	遺構	口径	胴部径	型式	備考	文献
鎌倉 76	田楽辻周辺遺跡 浄明寺一丁目 661	据甕	-	90.0	6b	据甕遺構 口縁部片を同一として型式判断	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16』2000
鎌倉 77	名越ヶ谷遺跡 大町七丁目 1615-8	2 面据甕	54.5	94.0	8	据甕遺構	
鎌倉 78	名越が谷遺跡 大町四丁目 1851-4	遺構 49	55.2	94.5	7	据甕遺構	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30』2014
鎌倉 79	西御門東やぐら群	9 号やぐら上層	50.0	89.5	7	やぐら	かながわ考古学財団『西御門東やぐら群』2005
鎌倉 80		1 号造成遺構下層	53.4	92.0	8	やぐらの外	
鎌倉 81	長谷小路周辺遺跡群 由比ガ浜三丁目 199-1	1 号方形竪穴建築址・土坑 1	48.5	75.0	8		由比ガ浜三丁目 199 番 1 地点所在遺跡発掘調査団『由比ガ浜三丁目 199 番 1 地点発掘調査報告書』1990
鎌倉 82		1 号方形竪穴建築址・土坑 1	37.0	66.0	6b		
鎌倉 83	長谷小路周辺遺跡群 由比ガ浜三丁目 254-1	二面面上	49.6	71.5	5		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 33』2017
鎌倉 84	長谷寺観音堂	第 2 号墓	64.0	81.0	8	甕棺墓	長谷寺観音堂改築工事出土文化財調査団『海光山慈光院長谷寺 観音堂新築工事に関わる埋蔵文化財の調査』1985
鎌倉 85	弁が谷遺跡 材木座六丁目 640-2・3	一面常滑据甕	51.4	90.0	7	据甕遺構	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26』2010
鎌倉 86	弁ヶ谷やぐら第 1 号やぐら		41.3	67.7	7	甕棺墓	かながわ考古学財団『弁ヶ谷やぐら群』2000
鎌倉 87	政所跡 雪ノ下三丁目 987-1・2	表土	36.8	40.5	11		政所発掘調査団『政所跡』1991
鎌倉 88	由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 由比ガ浜二丁目 1235-4	遺構 12	53.0	81.0	8	常滑溜り	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 34』2018
鎌倉 89	由比ガ浜中世集団墓地遺跡 由比ガ浜四丁目 1136	方形竪穴 3	45.4	67.5	8		由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団『由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 由比ガ浜四丁目 1136 番地 (KKR 鎌倉若宮荘地点)』
鎌倉 90	由比ガ浜中世集団墓地遺跡 由比ガ浜四丁目 4-30 地点	常滑溜り 1	46.0	84.0	7		由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団・鎌倉市教委『由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 由比ガ浜四丁目 4 番地 30 号地点』1996
鎌倉 91	永福寺経塚		35.4	51.4	渥美	経塚外容器	鎌倉市教委『史跡永福寺跡 - 平成 8 年度 -』1997
鎌倉 92	横小路周辺遺跡群 二階堂荏柄 10-1	土坑 3	51.2	95.0	6b		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 19』2003
鎌倉 93	横小路遺跡	3 b 面上	53.0	83.6	5		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20』2004
鎌倉 94	来迎寺北遺跡 関谷字中道 1257 番	-	-	94.9	-	甕棺墓	鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』1983
鎌倉 95	若宮大路周辺遺跡 小町一丁目 83-1	第 610 号方形竪穴	45.0	72.0	5		早見芸術学園埋蔵文化財発掘調査団・(株)四門文化財研究室『鎌倉市早見芸術学園改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告』1993
鎌倉 96	若宮大路周辺遺跡 小町一丁目 322	方形竪穴建築址 1	52.0	94.5	7	竪穴建物内の据甕	若宮大路周辺遺跡調査団『若宮大路周辺遺跡群小町一丁目 322』1997
鎌倉 97	若宮大路周辺遺跡 小町一丁目 324-4	遺構 113	46.8	65.5	5		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 37』2021

地域	遺跡名	遺構	口径	胴部径	型式	備考	文献
鎌倉 98	若宮大路周辺遺跡群 御成町 771-1 他	8 号溝	47.2	63.0	2		株式会社イビソク『若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)』2021
鎌倉 99	若宮大路周辺遺跡群 御成町 868	建物 7	47.3	74.0	渥美		若宮大路周辺遺跡調査団『若宮大路周辺遺跡群御成 866 番地点』1993
鎌倉 100		IV面上	54.0	75.0	渥美		
鎌倉 101	若宮大路周辺遺跡群 小町一丁目 333-2	据喪遺構	48.8	86.0	8	据喪遺構	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 36』2020
鎌倉 102	若宮大路周辺遺跡群 大町一丁目 1034-9	二面 130・138 号遺構	-	63.0	-	竪穴建物内の据喪遺構	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 32』2016

第 3 表 用途別にみた関東の大甕

	用途	遺跡	遺構	口径	最大径	型式	備考	文献
1	一括銭容器	群馬県 大泉町満願寺出土銭	偶発	-	57.8	-		岩名建太郎「収容行為より考察する中世大量出土銭の性格」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 20 周年記念論文集』2004
2	一括銭容器	みなかみ町古馬牧小学校出土銭	偶発	47.3	71.6	-		
3	一括出土銭	茨城県 稲敷市馬掛備蓄銭	偶発	46.0	77.0	8	洪武通寶最新	大塚淳「茨城県阿見町の掛馬備蓄銭」『出土銭貨』8 1997
4	経塚	茨城県 小美玉市要害山 3 号墳	採集	36.6	61.2	5	外容器か	橋場君男「雷電山古墳出土の経塚遺物について（下）」『玉里村史料館報』vol 3 1998
5	経塚	茨城県 桜川市門毛経塚	偶発	43.2	71.8	3		阿久津久「門毛経塚と中世遺物」『茨城県立歴史館報』12 1985 奈良国立博物館『関東・北陸地方に埋納されたやきもの』（特別陳列 経塚出土陶磁展 3）1997
6	甕棺墓	茨城県 行方市大麻古墳群	1 号墳墓	32.0	54.0	9		麻生町教委『大麻古墳群発掘調査報告書』1988
7	甕棺墓	千葉県 市原市根田 130 号墳	土坑中	42.5	60.7	6a		市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査会『上総国分寺台発掘調査概報』1980
8	甕棺墓	千葉県 市原市台遺跡	E 地点 473 号遺構	-	65.5	6a~6b	年代は報告書による	市原市埋蔵文化財センター『市原市台遺跡 E 地点』2017
9	甕棺墓	千葉県 市原市台遺跡	E 地点 473 号遺構	41.4	63.0	9		
10	甕棺墓	千葉県 市原市山倉 1 号墳	A 地点 392 号遺構	41.2	60.0	6a~b		市原市埋蔵文化財センター『市原市台遺跡 A・D 地点』2014
11	甕棺墓	千葉県 市原市山倉 1 号墳	1 号土坑墓	48.8	65.8	4		市原市文化財センター『上総国分寺台遺跡報告書 XI』2004
12	蔵骨器	千葉県 香取市台遺跡	墓域	40.0	65.5	5		
13	蔵骨器	千葉県 香取市台遺跡	墓域 9 号遺構	45.0	63.0	6 a		香取市文化財センター『主要地方道成田小見川鹿島港線 - 沢 工区の埋蔵文化財発掘調査報告書 -』1999
14	蔵骨器	千葉県 香取市台遺跡	墓域 1 号遺構	43.0	69.5	3		
15	蔵骨器	千葉県 香取市台遺跡	墓域	41.5	64.0	7		
16	甕棺墓	千葉県 鎌ヶ谷市根郷貝塚	甕棺墓	39.9	61.5	5~6a		鎌ヶ谷市教委『千葉県鎌ヶ谷市根郷貝塚発掘調査報告書』S63・山田友治「根郷貝塚出土の蔵骨器について」『鎌ヶ谷市史研究』2 1989
17	甕棺墓	千葉県 鎌ヶ谷市根郷貝塚	甕棺墓	46.5	65.0	5		
18	甕棺墓	千葉県 鎌ヶ谷市根郷貝塚	甕棺墓	41.9	65.0	4		

	用途	遺跡	遺構	口径	最大径	型式	備考	文献
19	甕棺墓	千葉県	木更津市天神前遺跡	第 6 号墓	47.0	46.5	5-6a	君津都市文化財センター『天神前遺跡』1991
20	蔵骨器	千葉県	佐倉市高岡大福寺遺跡	F 区 17 号土坑	-	-	9	財団法人印旛都市文化財センター『千葉県佐倉市高岡遺跡群Ⅰ』1993
21	甕棺墓	千葉県	千葉市廿五里城跡	塚	40.6	60.0	9	継ぎ痕跡
22	甕棺墓	千葉県	富津市植ノ台遺跡	中世墓	39.4	56.0	10・11	君津都市文化財センター『植ノ台遺跡』平成 3
23	一括出土銭	千葉県	船橋市本町	偶発	-	-	-	明治 2 年「各高 4 尺径三尺余」の甕 3 つ出土 小高春雄「千葉県下の大量出土銭」『出土銭貨』16 2001
24	一括出土銭	千葉県			-	-	-	
25	一括出土銭	千葉県			-	-	-	
26	埋納遺構	埼玉県	行田市下忍		-	-	6?	土人形埋納
27	甕棺墓	埼玉県	久喜市高柳小草原遺跡	偶発	46.0	66.0	8	栗橋町教育委員会『栗橋町史』第 3 巻 2008
28	井筒に転用	埼玉県	熊谷市諏訪木遺跡	E 区第 1 号井戸	44.5	68.8	5	埼玉県埋文事業団『諏訪木遺跡Ⅲ』2008
29	一括銭容器	埼玉県	熊谷市玉井古銭	偶発	52.0	-	8-9	宣徳通寶最新
30	経塚	埼玉県	熊谷市妻沼経塚	偶発	41.0	77.0	2-3	経塚外容器
31	甕棺墓	埼玉県	熊谷市若松遺跡	1 号土葬墓	50.6	79.6	8-9	人骨（歯のみ）
32	一括銭容器	埼玉県	鴻巣市屈巢	偶発	36.9	57.2	9	一括銭容器最新咸淳元寶（1265）
33	据甕遺構か	埼玉県	さいたま市上大久保新田遺跡	第 52 号土坑	51.0	-	6b-7	浦和市遺跡調査会『上大久保新田遺跡発掘調査報告書』1987
34	甕棺墓	埼玉県	さいたま市道場寺院跡	25 号土壇	46.0	74.0	10	硝子小玉、人骨（歯のみ）
35	一括銭容器	埼玉県	蓮田市新井堀の内遺跡	第 1 号埋蔵銭	51.4	92.6	9	埼玉県埋文事業団『新井堀の内遺跡』2020
36	一括銭容器	埼玉県		第 3 号埋蔵銭	59.2	96.0	9	
37	一括銭容器	埼玉県	東松山市高坂	偶発	30.0	54.0	-	昭和 27 年報告による。現存せず
38	蔵骨器か	埼玉県	深谷市岡部六弥太墓		-	-	-	平田重之「岡部六弥太墓の調査」『第 25 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』（埼玉県考古学会ほか）1992
39	据甕遺構	埼玉県	毛呂山町堂山下遺跡	平成 8 年度試掘調査 SX1 / 第 2 次調査 10 号土坑	55.0	85.2	8	竪穴遺構内の据甕
40	一括銭容器	埼玉県	和光市白子	偶発		約 90.5		毛呂山町教育委員会『堂山下遺跡（範囲確認調査・発掘調査）鎌倉街道 B 遺跡』2001 毛呂山町教育委員会『堂山下遺跡 - 第 2 次発掘調査報告書 -』2013
41	蔵骨器の外容器	埼玉県	吉見町金蔵院	永和二年銘宝篋印塔下	43.0	67.9	渥美	蔵骨器（白磁四耳壺）の外容器

	用途	遺跡		遺構	口径	最大径	型式	備考	文献
42	甕棺墓	東京都	小金井市貫井南町三丁目	偶発	51.0	83.0	6b~7		小金井誌史編さん委員会『小金井誌史Ⅱ歴史編』1970
43	据甕遺構	東京都	八王子市多摩ニュータウンNo.692	A区36S14土坑外	48.0	75.0	2・3		東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡昭和61年度（第2分冊）』1988
44	据甕遺構	東京都	日野市栄町遺跡	20号土坑	55.0	88.8	9		日野市栄町遺跡調査会『日野市栄町遺跡』1994
45	一括出土銭容器	東京都	府中市武蔵国府関連遺跡群	M48-SX6	40.0	58.0	9		府中市教育委員会・府中市遺跡調査会『武蔵国府の調査19』2001
46	一括出土銭容器	東京都		M48-SX7	46.5	66.7	9		
47	甕棺墓	東京都		N51 - SZ9	50.6	90.6	6b		
48	甕棺墓	東京都	府中宮町 2-21	偶発	57.0	100.0	9	骨粉付着	英太郎「府中宮町出土の常滑大甕について」『府中市立郷土館紀要』第12号1986
49	甕棺墓（報告書による）	東京都	府中市武蔵国府関連遺跡群	M59-SZ18	46.8	68.2	5	人骨無し	府中市教委・府中市遺跡調査会『武蔵国府関連遺跡調査報告書17』1996
50	甕棺墓（報告書による）	東京都		M59-SZ14	57.5	93.2	9~10	地下式横穴埋設 人骨無し	
51	甕棺墓（報告書による）	東京都		M59-SZ6	-	61.2	5~6a か	人骨無し	
52	据甕遺構	東京都		M59-SX107	-	46.0+	渥美		
53	蔵骨器	神奈川	伊勢原市子易中川原遺跡		-	-		整理中	
54	蔵骨器	神奈川			-	-		整理中	
55	据甕	神奈川	小田原御組長屋遺跡第Ⅱ地点	第Ⅱ地点15号土坑	60.0	79.5	10		都市計画道路小田原早川線改良工事遺跡発掘調査団『御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点発掘調査報告書』2001
56	据甕	神奈川			60.0	81.0	11		
57	蔵骨器か	神奈川	小田原市久野南舟ヶ原遺跡第1地点	集石遺構	43.0	64.0	5		小田原市教育委員会「久野南舟ヶ原3261における確認調査」『平成12年度試掘調査報告書』2000
58	甕棺墓	神奈川	平塚市 真田北金目遺跡群 50D区	SKD001	50.5	84.0	10	甕棺墓	平塚市真田・北金目遺跡調査会『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書8』2011
59	据甕か	神奈川	平塚市立博物館蔵					酢生産 埋設は古記録から推定	白石裕司・村山卓「平塚市博物館所蔵の常滑焼大甕」『品川歴史館紀要』26 2011
60	蔵骨器	神奈川県鎌倉市	朝比奈砦 鎌倉市十二所字関ノ上310-1の一部他	納骨穴	48.0	88.0	8		鎌倉市教委『朝比奈砦発掘調査報告書』2002
61	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	甘縄神社遺跡群 長谷一丁目227-24	第一面土壇1	-	-	-		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29 平成24年度発掘調査報告書』2013
62	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	今小路西遺跡 御成小学校内地点平成元年度試掘・確認調査	T-2 常滑据甕	59.5	97.2	8		今小路西遺跡発掘調査団編『今小路西遺跡（御成小学校内）平成元年度試掘及び確認調査概報』1990
63	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	今小路西遺跡 由比ガ浜一丁目163-1	遺構477	56.5	92.0	7・8		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書37』2021

	用途	遺跡		遺構	口径	最大径	型式	備考	文献
64	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	今小路西遺跡（御成小学校内）	南一面7区据襲1	-	-			今小路西遺跡発掘調査団『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』1990
65	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	今小路西遺跡 御成町1 7 6-7	一面据襲1	55.0	87.2	7		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29』2013
66	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	円覚寺門前遺跡 山内字松岡1323・1 1338・2	据襲遺構1	39.6	55.0	9		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書36』2020
67	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	大蔵幕府周辺遺跡 雪ノ下三丁目648-3	三面据襲遺構1	51.2	89.0	9		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書35』2019
68	甕棺墓	神奈川県鎌倉市	亀ヶ淵やぐら群2号窟	偶発	59.4	-	-		鎌倉市史編纂委員会『鎌倉市史』考古編 1959 赤星直忠「室町中期における一葬法について」『考古学雑誌』34-4 1943
69	甕棺墓	神奈川県鎌倉市	亀ヶ淵やぐら群3号窟	偶発	-	-	-		
70	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	下馬周辺遺跡 由比ガ浜二丁目1075 外	35号竪穴	56.0	92.0	9	竪穴建物内の床面に埋設	かながわ考古学財団『下馬周辺遺跡』2014
71	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	五合柵遺跡	B区二段目調査区	54.2	80.8	8		鎌倉市教委『五合柵遺跡（仏法寺跡）』2003
72	蔵骨器	神奈川県鎌倉市		D-1区土坑2	-	60+	6a	型式は口縁部破片から	
73	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	小町大路東遺跡 大町一丁目1147	遺構115	48.8	53.2	6b		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書35』2019
74	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	米町遺跡 大町二丁目2315 外	据襲	-	62+	-		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』1995
75	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	米町遺跡 大町二丁目2324 番1 外	一面上層据襲1	-	70+	-		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 平成15年度発掘調査報告書』（第一分冊）2004
76	据襲遺構	神奈川県鎌倉市		二面上層据襲2	-	89.5	5?	年代は報告書より	
77	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	笹目遺跡 笹目町302-5	据襲	-	67+	-		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』1995
78	据襲遺構	神奈川県鎌倉市		据襲	-	67+	-		
79	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目476-1	1面据襲	-	87+			鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18』2003
80	据襲遺構	神奈川県鎌倉市		1面据襲	30.8	103+	8	底部と同一個体か	
81	経塚	神奈川県鎌倉市	浄光明寺境内		55.3	95.5	8	『浄光明寺絵図』の「経塚」記載場所から出土	宮田真「経塚の発掘」『浄光明寺敷地絵図の研究』新人物往来社 2005
82	一括銭容器	神奈川県鎌倉市	浄智寺下遺跡山内字金宝山1429		58.2	97.8	7	永楽通寶最新	鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1983
83	据襲遺構	神奈川県鎌倉市	推定藤内貞員邸跡 小町一丁目309-5	83土壌	47.0	76.2	6b～7		（推定）藤内貞員邸跡発掘調査団『小町一丁目309番地5地点発掘調査報告』1983

	用途	遺跡	遺構	口径	最大径	型式	備考	文献
84	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	杉本寺周辺遺跡 二階堂字杉本 912 番 1 ほか	一面建物 6	49.0	85.5	8	杉本寺周辺遺跡発掘調査団『杉本寺周辺遺跡 二階堂字杉本 912 番 1 ほか地点 発掘調査報告書』2002
85	据甕遺構	神奈川県鎌倉市		一面建物 6	27.8	90.0	-	
86	据甕遺構	神奈川県鎌倉市		一面据甕	56.0	85.5	8	
87	据甕遺構	神奈川県鎌倉市		二面井戸 3	21.1	82.0	-	
88	据甕遺構	神奈川県鎌倉市		二面据甕 2	-	83.0	-	
89	据甕遺構か	神奈川県鎌倉市	諏訪東遺跡 御成町 806 番 - 5 他	第 5 号方形建築址埋設甕	-	46.0	～ 竪穴建物内	諏訪東遺跡調査委員会『諏訪東遺跡』1985
90	甕棺墓	神奈川県横浜市	瀬戸町やぐら群第 5 号やぐら（横浜市）	第 5 号やぐら第 1 号土壇	57.0	87.6	8	かながわ考古学財団『瀬戸町やぐら群・横穴墓』2000
91	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	田楽辻周辺遺跡 浄明寺一丁目 661	据甕	-	90.0	6b 口縁部片を同一として型式判断	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16』2000
92	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	名越ヶ谷遺跡 大町七丁目 1615-8	2 面据甕	54.5	94.0	8	
93	据甕遺構	鎌倉周辺	名越ヶ谷遺跡 大町四丁目 2395- 2 の一部外	埋甕 1	-	61.0+	-	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22』2006
94	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	名越山王堂跡 大町三丁目 1340 他	据甕	-	75.0		山王堂跡発掘調査団『名越・山王堂跡』1990
95	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	能満寺跡 材木座二丁目 294-3 外	第一面土坑 2	-	-	-	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 平成 18 年度発掘調査報告書』2007
96	甕棺墓	神奈川県鎌倉市	長谷寺観音堂	第 2 号墓	64.0	81.0	8	長谷寺観音堂改築工事出土文化財調査団『海光山慈光院長谷寺 観音堂新築工事に関わる埋蔵文化財の調査』1985
97	甕棺墓	神奈川県鎌倉市	弁ヶ谷浜口邸やぐら	偶発	-	-	-	鎌倉市史編纂委員会『鎌倉市史』考古編 1959
98	甕棺墓	神奈川県鎌倉市	弁ヶ谷やぐら第 1 号やぐら		41.3	67.7	7 甕棺墓	かながわ考古学財団『弁ヶ谷やぐら群』2000
99	溝の護岸に再利用	神奈川県鎌倉市	山ノ内道周辺遺跡 山ノ内字東管領屋敷 180-10	石列 4	-	88.0	-	山ノ内道周辺遺跡発掘調査団・鎌倉市教委『山ノ内道周辺遺跡発掘調査報告書』1997
100	経塚	神奈川県鎌倉市	永福寺経塚		35.4	51.4	渥美 経塚外容器	鎌倉市教委『史跡永福寺跡 - 平成 8 年度 -』1997
101	甕棺墓	神奈川県鎌倉市	来迎寺北遺跡 関谷字中道 1257 番	-	-	94.9	～	鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』1983
102	甕棺墓	神奈川県鎌倉市	理智光ヶ谷やぐら	偶発	-	-	-	鎌倉市史編纂委員会『鎌倉市史』考古編 1959 赤星直忠「室町中期における一葬法について」『考古学雑誌 34-4 1943
103	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	若宮大路周辺遺跡群 小町一丁目 332	方形竪穴建築址 1	52.0	94.5	7 竪穴建物内の据甕	若宮大路周辺遺跡調査団『若宮大路周辺遺跡群小町一丁目 322』1997
104	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	若宮大路周辺遺跡群 小町一丁目 333-2	据甕遺構	48.8	86.0	7	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 36』2020
105	据甕遺構	神奈川県鎌倉市	若宮大路周辺遺跡群 雪ノ下一丁目 161-33	二 b 面据甕 1	-	-	6b 型式は併出の口縁部片より	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22 平成 17 年度発掘調査報告書』2006

	用途	遺跡		遺構	口径	最大径	型式	備考	文献
106	据甕遺構	神奈川県 鎌倉市	若宮大路周辺遺跡 群 大町一丁目 1034-9	二面 130・ 138 号遺構	-	63.0	-	竪穴建物内 の据甕	鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 32 平成 27 年度発掘調査報告書』2016
107	据甕遺構	神奈川県 鎌倉市	西御門遺跡 西御 門一丁目 11-4	第 7 面遺構 533	50	-	6b		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 32 平成 27 年度発掘調査報告書』2016
108	据甕遺構	神奈川県 鎌倉市	西御門遺跡 西御 門一丁目 681-1	第 1 面土坑 6	-	-	-		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 32 平成 27 年度発掘調査報告書』2016
109	据甕遺構	神奈川県 鎌倉市	弁が谷遺跡 材木 座六丁目 640-2・ 3	一面常滑据甕	51.4	90	7		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26』2010
110	据甕遺構	神奈川県 鎌倉市	名越が谷遺跡 大 町四丁目 1851-4	遺構 49	55.2	94.5	7~8		鎌倉市教委『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30』2014

第4表（参考） 新井堀の内遺跡第一次調査の出土陶磁器類（破片数）一覧表

遺構名	舶載磁器			国産磁器					土器類										中世以外の遺物 備考	
	青花	青磁	白磁	古瀬戸	常滑甕	常滑鉢	常滑不明	瀬戸美濃大窯製品	かわらけ	鉢	揃鉢	内耳土器	鍋か焙烙	北武蔵系焙烙	常陸系焙烙	火鉢類	不明			
SB1 P 2									1											
SB1 P 3							1		4											
SB1 P 4									8											
SB1 P 5									1									土師器環		
SB1 P 6									6								1			
SB1 P13	1							1	8											
SB2 P12									4											
SD1			1		6				7					4				肥前磁器碗 4、肥前陶器三島手鉢 1、内野山窯系皿 1 土師器 2		
SD2					5				6					1		1		近代磁器碗 1、瀬戸美濃揃鉢、丹波揃鉢		
SD3		1			11			1	4	3					1	1		志野皿 2、肥前磁器碗 1、瀬戸美濃徳利 1		
SD2/3 一括					1				1					1	1			肥前磁器碗 1、肥前磁器環 1、瀬戸美濃香炉・鉢各 1、明石塀揃鉢 1		
SD7																		近世。瀬戸美濃贅水入 1		
SD8					1				1											
SE1					3			1	76					18	3			近世遺構。志野皿 2 碗 1、肥前陶器呉器手碗 1		
SE3				1	15			1	9	2								須恵器甕 1		
SE7					1								1							
SE21									1											
1 号埋蔵銭				1	4												1			
2 号埋蔵銭					1															
3 号埋蔵銭					1															
SK47 地下式坑					2				3											
SK61 地下式坑					5	1		2	11		1					2		瀬戸美濃陶器徳利 1		
SK1					5													近代 幕末～近代遺物多数		
SK2																		産地不明陶器 1 近世瓦 2		
SK3																		近代 型紙摺絵磁器鉢 1、瀬戸美濃系磁器端反 1、近代陶器 1、瓦 1、コンクリ塊		
SK9									3											
SK11									2											
SK16									2											
SK19																	1			
SK26									3											
SK40									1											
SK43									6		1			1						
SK45									1											
SK48									2											
SK54									1											
SK57																		肥前磁器碗 1		
SK60				1																
H17p34									1											
H19p4									1											
I16p5.6																		瀬戸美濃磁器碗 1		
I17p1					1				1											
I17p2									2											
I17p4									2											
I17p5									2											
I17p6									1											
I17p8									1											
I17P33									1											
I17p41									1											
I17p43									2											
I17p46.47									1											
I17p50.51 SK53									1			1								
I17p59									1											
I17p66									1											
I17p69									1											
I17p79									1											
I18p1							1		1											
I18p2									1											
I18p7									1											
I18p11.12.14.15							1					1								
I18p13							5													
I18p20									3											
I18p21									2											
I18p22									1											
J16p1.2									3											
J16p11									1											
J16p15									2											
J16p16									2											
J16p34									1											
J17p7									1											
J17p15									1											
J17p41																1				
遺構小計	1	1	2	3	62	1	7	6	193	5	2	2	1	25	5	5	2			
調査区一括	2			1	7	1		3	省略（調査区一括遺物は陶磁器類のみカウント）											
陶磁器計	3	1	2	4	69	2	7	9												